息子などからそのことを聞いた常陸の介は道の騒しくならない間に山を越えてしまはうと道を急いだのであつたが、打出の濱を行く頃にもう源氏の君は粟田山までお出でになつたと云つて、先拂の供廻りが幾人とも知れず道を來るのに逢つた。常陸の介は關山で馬から降りて女の乘つた車などを木の蔭に引き込ませなどして源氏の君の通り過ぎるのを待つて居た。常陸の介家の車は一部を先へ遣り、また一部を遲れさせて後から來させなどして居るのであつたが、それでも十臺位は地方官の富が伺はれるほど花やかに美々しく爲立てられて留つて居た。九月の三十日で、山の紅葉も下草も皆赤がちの色となつて居る所へ關の陣所からさつと零れたやうに出て來た絞染の着物などを着た旅裝束の常陸の介家の供廻りの姿などを面白い風情であると思つて源氏の君は見て居た。右衛門佐になつて居る昔の小君を源氏の君は車の處へ呼んで、

『關迎へをさせて貰つたね。やつぱり緣があるのだね。』と云つた。話したいことも澤山あつたが人中では云ふこともならなかつた。空蟬の君も心の中で、

淚流れてやみがたし
君と行きあふ關山の
清水の如くやみがたし
かばかり思ふ心だに
知り給はじと思ふにも。

こんなことを思つて居た。二三日して石山觀音の參籠を濟ませて源氏の君が京へ歸らうとする時迎へに右衛門佐が來た。この人が初めて位階を貰つた頃などは、萬事源氏の君の世話になつて居たのであつたが、あの騒動の起つた時災の及ぶのを避けて常陸へ行つたのを源氏の君は餘り嬉しくも思はなかつたのであつたが、今度歸つて來てから

はまた昔通り家來の一人として貰つた。紀伊守は國の小い河内守になつて居た。官爵を削られることも何とも思はずに源氏の君の傍に附いて離れなかつたその弟の右近將監を源氏の君がめきめきと取立てたのを見て河内守も右衛門佐も心の足りなかつたことを後悔して居た。ある日源氏の君は右衛門佐を呼んで空蟬の君に文を持つて行くことを頼んだ。古い戀をまだ忘れずに居たのかと右衛門佐は驚いた。

この間あんな處で逢ふとは、よくよく前世からの因緣の深い戀だと私は思つた。あなたはさうは思はなかつたのですか。しかし私ははかなかつたのですよ。ある一人の男が妬ましかつた。

手紙はこんなのであつた。

『あの方のお氣の濟むやうな返事をお上げなさい。あなたは女なんだから、烈しく戀をされて、それに動かされたと云ふことになつたつ

て罪にはならない。』

などと弟は云つて居た。女も知らぬ顏は作りおほせなかつたか、

戀と云ふものをして居る女は、時々死ぬ程の悲しい思ひに逢ふものとこの間なども思ひました。夢のやうに嬉しいとも思ひながら。

と云ふ短い返事を書いた。戀しい事もつれなくされた恨めしい事も忘れない影を心に殘させた女であつたから、源氏の君はそれから後も時々手紙を送つて居た。さうして居るうちに年が年の常陸の介は病氣になつた。

『俺が死んだ跡でお母さんを疎かにしてはいけないよ。俺だと思つてよくしなければいけない。』

と口癖のやうに息子や女に云つて居た。

『あなたを守るために魂だけを殘して置きたい。子だと云つたつて頼にはならないから。』

と空蟬の君に云ひながら常陸の介は死んでしまつた。その當座は父親がああ云つたからと思つて親切を見せる繼息子や繼女もあつたが、次第に辛い思を空蟬の君にさせることが多くなつた。好色者の河内守だけは、

『私に何も氣をお置きになることはありませんから、思つていらつしやることがあつたら何でも云つて下さい。』

などと云つて機嫌を取るのであつたが、この人のあさましい心を知つて居る空蟬の君は、不運な我身を吊ひながら誰にも云はないでそつと尼になつてしまつた。河内守は腹を立てて、

『私を嫌つて尼なんかになつてどうするつもりだらう。私に世話をして貰はないでどうして行けるものか。』

とつぶやいて居た。

繪合

前齋宮の女王の女御におなりになることは事實になつて來た。母がないのであるから細い處まで氣を附ける者がないであらうと思ふから、二條院へお伴れして來て萬端の用意をおさせしようと源氏の君の思つたことは院の陛下への遠慮でやめにして、六條の家から直ちに宮中へお入りさせることにした。表面に現はれずに濟む程度で源氏の君は親に變らない世話をして居るのであつた。院は非常に失望しておいでになるのであるが、未練らしく思はれることを恥しくお思ひになつて、その事の決つてからは女王に文をお上げになることはなくな

つて居た。入内の當日になつて院の陛下は、着物櫛の箱薫物の箱などの目の覺めるやうな贈物を使に持たせてお遣しになつた。源氏の君に見せて術なく思はさうと云ふお心もあつたらしい。丁度源氏の君の來て居た時であつたから宮の女別當がさう云つて見せた。細い美しい細工のした櫛の箱の中の挿櫛を入れた小い箱を結んだ紐に、

都を君に思ふなと
そのくろ髪にさしし櫛、
さはれわれをば思ふなと
挿ししに似たり。そのかみの
齊の君がつげのくし。

と書いた紙が結びつけてあつた。これを見た源氏の君は熱い涙が湧いて來た。兄君の院の心がお可愛さうで、これが自分のことであつたならと思ふのである。女王が伊勢に居た間六七年も片思ひをしてお

いでになつて、その人が京へ歸つて來て、戀がこれから圓滿に遂げられようとする時に、女王が御弟の陛下の妃にお、なりになるのであるから、どんなにはかなくお思ひになるであらう。こんなことも大權を去つてしまつたからであると、おひがみになるであらう。自分であつたなら決つとさう思つて世の中を恨むであらうと、それからそれへと思ふ程、いよいよ上皇がおいとしくてならない。何のために自分は餘計なことを思ひついて、優しい兄君を煩悶させるのかと思つて溜息をついて居た。女王は伊勢へ行くわかれの式にお泣きになつた若い美しい天皇のお姿をおなつかしく思つて見た幼い記憶が呼び起こされて、人に見られないやうにして泣いておいでになつた。母君のこともそれと一緒に思ひ出されて一層胸が苦しくおなりなるのである。

別るとてはるかに云ひし一言もかへりてものは今ぞ悲しき

こんな歌を女王は院の陛下にお上げになつた。院と女王とは他から

見ても丁度よい戀人同志と見えるのに、まだ十三でおありになる陛下に奉仕される事を計つた自分を女王の方からも恨んでおいでにはなるまいかと、ふとそんなことも源氏の君は思つたが、今日になつて中止することの出來ることではないのであるからさりげなくして居た。大人の女御の來るのは耻しいと陛下は思つておいでになつたのであるが、小柄な若々しい、もの柔かな、美しい王女御を御覽になつてなつかしい人だとおおもひになつた。弘徽殿の女御を陛下は早くからの馴染の内輪の戀しい人と思つておいでになつた。清涼殿へ夜の宿直にお召しになるのは、雙方同じ事にされたが、晝などおいでになるのは遊び友達のやうにも思つておいでになる弘徽殿の女御の御殿への方が多かつた。權中物言は后に立てる望を持つて女を女御にしたのが、源氏の君が親のやうになつて、競爭者を宮中へ入れたのを腹立たしく思つて居た。院の陛下は女王の歌を御覽になつてからは猶更その人を

忘れられなく思つてお出でになる。源氏の君が院へ伺候した時、院は今度の齊宮が伊勢へ下向されたことなどから、その人を戀しいと思つて居たなどとはお云ひにならないが王女御が御自身の代の初めに伊勢へ行かれた時のことなどを忘られない樣子でお話しになつた。失つた戀の悲しみのお見えになるのを源氏の君は深くお氣の毒に思ふのであつた。それほどに美しいと院のお身にしんだ王女御のお顏は、どれ程の美しさなのか見たいものであると思ふのであつたが折がなかつた。こんなに二人の女御が同じやうに陛下の寵幸を得て居るのをお見になつて兵部卿の宮は姫樣を女御にお出しになることが出來ないない樣に思つて控へてお出でになつた。陛下は何よりも繪畫に趣味を持つておいでになつた。お好きであるからお描きになることも誠にお上手であつた。王女御も繪をお書きになつたから、これがお心にかなつて以前に倍して御寵愛がある。お傍の男も繪のたしなみ

のある者をお好きになる程なのであるから、綺麗な女御が繪筆を持つて首を傾けて紙にむかつて居る美しさがお心にしんで、またしてもお足は王女御の梅壺の御殿へ向くやうになつた。權中納言はそのことを聞いて、女の女御の所へ諸名家に描かせた繪を持つて行つた。珍しくお思ひになつて、

『梅壺の女御にも見せてやりたいから、彼方へ持つて行つても好いか。』

と陛下がお云ひになると、

『持つておいで遊ばしてはいけません、つまらないのですから。』

と云つて女御はそれをしまつてしまふ。こんなことが毎度あるのを源氏の君が聞いて、

『陛下をそんなにお惱しするなどと、權中納言は怪しからんことを女御にさせる。負ぎらひな人だ。』

と云つて笑つて居たが、

『私も古い繪などをいろいろ持つて居りますから、差しあげます。』

と梅壺においでになつた陛下にお云ひして、二條院の繪の戸棚を開けて紫の君と一緒に、どれがいいであらうと選るのであつた。旅から持つて歸つて來た箱も開けて、須磨明石の寫生の畫帖を出して、源氏の君は初めてこれを紫の君に見せた。

『何故今迄見せて下さらなかつたのでせう。』

と云つて繪を見ながら紫の君はその時代の悲しかつたことを思ひ出して涙を零して居た。

『女院にだけはお目にかけたいと思つて居る。』

かう云つて源氏の君はその中から、須磨と明石の心持のよく現れたのを一帖づつ選つて居たが、明石の君を戀しいと思ふ思ひに胸をそそられるやうな氣がして居た。源氏の君が陛下に繪を奉ると聞いて、權中納言は厄鬼となつて好い繪を集めて居た。三月の初めであるから日

も長くはあるし、式日などもない暇な頃であるから、雙方のを繪合せにして勝敗を決める催しをするのも面白いことであらうと思つて、それからは源氏の君も一層熱心にその方に骨を折つて居た。繪卷物は、梅壺の王女御の方は古典的の文學から題を取つたものを書かせ、弘徽殿の女御の方では近代文學から材を選んだ繪を畫かせてあつた。花やかで心を引き附けるのはこの方が多いやうである。相當な學識のある女官を左右に分けて、梅壺の方には平典侍、侍從の內侍、少將の命婦が附き、弘徽殿の方には大貳の典侍、中將の命婦、兵衛の命婦が附いて批判をし合つた。繪その物よりも古典的文學の價値、近代的文學の價値を爭ふやうなことになつたが、女院は伊勢物語が好いと云ふ古典派の味方であつた。若い女達が死ぬ程見たいと思つて居る陛下や王女御のお筆の繪はまだ席上に顯れない。源氏の君はこの會をもう一層大きくして批評を男にさせやうと發議した。さう決めて勝敗は日を改め

て定めることになつた。そんなこともあらうかと思つて、梅壺の方では勝れた繪をまだ餘り出さなかつたのである。その中へ須磨明石の繪も源氏の君は交せて置かせた。權中納言も家へ畫師を伴れて來てまた新に繪を秘密にして描かせて居た。院の陛下もこんな催がありとお聞きになつて、王女御に繪をお贈りになつた。昔の朝廷の年中行事のいろいろを古名匠が描いて帝王が讃をされたものと、御自身の代にあつたことを繪にされたものとであつたが、齋宮の下向の時の大極殿の儀式は御一生のうちで一番深い印象を受けてお出でになるのであるから、繪の描きやう配置を一々巨勢公茂にお敎へになつてお描かせになつたのである。左近の中將が使になつてこれを持つて來た。大極殿に齋宮のお乘りになつた輿のある神々しい處に、

心のみとこ新しく悲しみぬそのかみに似ぬわが身なれども

と云ふ歌が書いてあつた。王女御は昔その日に挿した簪の端を少し

折つて、それに、

なつかしさ唯この今のここちしぬ思ひしむには古もなし

と書いて青い紙に包んでお上げになつた。これを御覽になつた院のお胸は苦しくなつて、もう一度位に歸つて見たいと云ふやうな思ひもおしになつた。源氏の君を恨めしいともお思ひになつた。院のお描きになつた繪は皇太后のお手から姪の弘徽殿の女御の方へも澤山行つた。尙侍もその方の趣味の深い人であるから、いろいろと集めて弘徽殿の女御に贈るのであつた。批判の任に當つたのは陛下の兄君の太宰の帥の宮である。多くの繪が雙方から出された最後に、須磨明石の繪が出たので右方は周章てた。源氏の君の樣な上手な人が靜に描いて置いた寫生の繪は、見る人の心が遠くぼうつとなるやうであつて、終には涙をさへ流させた。左が勝になつて夜が明けて來た。

「あなたは學問は別として、一番お得意なのは一絃琴をお彈きになる

こと、それからは横笛、琵琶、十三絃の琴と云ふ順にお上手だとお崩れになつた陛下が云つておいでになりましたが、繪などはこんなにお描きになるとも誰も知らなかつたでせう。」

と帥の宮はお云ひになつて、源氏の君の顏を見て少しお醉泣をしておいでになつた。須磨明石の繪は女院のお手許へ改めて源氏の君は差し上げた。この前後の帖が見たいと女院は云つてお出でになる。この繪合に限らず源氏の君が强大な後援者になつて、萬事自分の女を梅壺の女御に押へさせようと思ふのであらうと、負けた權中納言は口惜しく思ふのであつたが陛下が弘徽殿の女御をお思ひになる御愛情の深いのを知つて居る心では、未來を樂觀せぬでもなかつた。源氏の君はこの頃佛堂を嵯峨に建てて居る。

松風

源氏の君は出來上つた東の院へ花散里の君をむかへた。それは西御殿一體の座敷と、正殿へ行く廊下添ひの細座敷などの廣い間で家來の詰所や事務室などもある。源氏の君の正妻の一人としての體面を十分保たせた設備がしてある。東御殿は明石の君を迎へて住ます所にしようと源氏の君は思つて居る。北御殿は特に廣く拵へさせていくつにも座敷廻りが爲切られてある。それは源氏の君の愛人であつて、たとへ妻とは云はれないでも、何時までもこの人を頼りにして行かうと思つて居るやうな人達を集めて置かうと云ふ源氏の君の思惑であ

つた。正殿は此處へ來た時の源氏の君の居所になるのであらう。明石へは始終音信が絶えない。何時の手紙にも必ず出京が促してある。自身などとは身分の違つた立派な女も、源氏の君の深い愛を得ることが出來ず、また捨ててしまはれもしない位置に立つて、少からぬ苦勞をして居ることを聞いて居る明石の君は、その中へ源氏の君の愛をどれほど贏ち得る自信もない自分が出て行くのはこの上もない無謀なことであらうとも思つて一方では上京を斷念して居るのであるが、生んだ子が田舍で育つたために源氏の君の子の中にも入れられないやうなことになるのも忍ばれないことであると思ふと、さうもならない氣がして悶えてばかり居た。親達も女の思つて居ることが道理であると云つて歎いて居るのを見ると、一層女は溜らなく心を苦しめた。母方の曾祖父に當る中務卿の宮の別莊が嵯峨の大井川の傍にあつて、まだ誰の手にも渡つて居ない。宮家の相續人も皆死に絶えた今は當然

それは明石の入道の妻の所有になつて居るのであるが、有福なこの家ではそれをどうしようとも思はないで今迄捨ててあつた。思ひ出して以前から別莊守のやうになつて住んで居る男を入道の妻は明石へ呼んだ。

『もう私達は京へ歸らない積りで居たのですが、女を京の方と緣を組ませなどしたものだから、是非彼方に家を一つ持たなければならないことになつたのです。さうかと云つて急に都會の眞中へ行くのも厭なものですから、峨嵯の方へ一先落附かうと思ふのですが、あなたの住んで居るのに必要な處だけは貸して置いても好いのだから座敷の方を急に繕はせて貰へないでせうか。』

『お持主が分らないやうなことになつて座敷なんかは隨分ひどくなつて居るものですから、下廻りの者の居る處だけを私の方の手で修繕してやつと住んで居ますが、この春頃から源氏の内大臣が寺を近

くへ建ててお出でになつて、その外にも寺だの別莊などがいつぱい出來て嵯峨へ人が澤山來るやうになりましたから、閑靜なお住居をなされたいと云ふ御注文にはどうですか。』

とその男は云ふ。

『源氏の內大臣とは緣續きになつて居るのですから、そのお寺へ近いのは丁度都合が好いのです。家の中のことなどは移つてから追々よくして行つても好いのですが、座敷の建替だの繕ひだのに至急にとり掛るやうに計つて下さい。』

『私のものになつた家と云ふのではないのですが、俺が持主だと云つて修繕する金を出す人もないものですから、そんなことで私が一寸大工を入れたりして住んで居るのですが、あの家に附いた田地と云ふものがありますが、それはあなたの叔父さんの民部大輔さんに相當なお禮をお上げして私が頂いたのです。』

と慾の深さうな目を見張つて云ふ。

『田地なんかは私の方ではいらないのです。今迄通り家の見廻りなどして、あなたの居た所にそのまま住んで居て貰ひませう。家の證書なんかは私の方にあるのですが其處の世話をして居る暇がなかつたのです。あなたに上げる給料なんかも長く拂ふ人がなかつたでせうが、精算して私の方から上げることにしませう。』

と入道の妻は云つた。自身が横領すれば出來るのだがとその男は思ひながら、その家と源氏の君とが關係のあるらしい言葉に少なからず怖氣もついて入道から十分の金を引き出してそれから普請にかかつた。こんな用意があるとも知らない源氏の君は明石の君が京へ行かうと云はないのを少し怒つて居たが、大井の家が出來上つてから、こんな所がありましたから、其處へ行く積りで居りますと云つて來た手紙を見て賢い爲方だと感心して居た。源氏の君の內密事には何に限ら

す昔から與つて居る惟光は、また源氏の君の意を受けて不都合がないか大井の家を見に行つた。

『大變景色の好い處で、川の傍にありますので、明石のお家から海を見て居た時と同じやうな氣が致しました。』

と惟光は歸つて來て云つて居た。源氏の君の造らせた寺は大覺寺の南の方であつて、瀧の傍の座敷などは大覺寺のそれよりも趣があつた。明石の君の家は松の木の澤山ある中に建つてある。室内の裝飾などは源氏の君の方からさせた。そして迎への者をだれにも知られないやうにして明石へ遣つた。住みなれた處を捨てて行くと云ふことが苦痛であるのに、その上父の入道を一人殘して置くのであるから明石の君は悲しがつて居る。源氏の君に迎へられて京へ上ると云ふやうなことは昔から入道が寢ても覺めても願つて居たことがかなつたことなのであるから嬉しくはあるが、女が傍に居なくなること、孫の世話

が出來ぬことなどが悲しくて、

『小い姫さんを見ないで私が生きて居られるだらうかね。』

と同じことを毎日云つて居た。母親も可愛さうである。良人が出家してからは一つの處に居るのでもないから、今度は無論女に從いて京へ行くのであるが、入道の頑固な氣質には困つて居ながらも、生れた京を出てこの明石で二人は死ぬ因緣だと周圍の寂しい中で慰め合つて居た人なのであるから、俄に別れるのが心細くて泣いて居る。秋であるから一層誰の心もしめつぽい。いよいよ立つと云ふ日の夜明に明石の君はなつかしい海を眺めて涙を零して居た。入道は後夜から佛前で泣きながら看經をして居た。孫の傍へ來て、

『俺のやうな年寄の坊主を祖父だと思つてまつはしてくれる可愛いこの孫に別れて、俺はこの先どうして暮して行かうと思つて居るのだらう。』

と云つて、零れて來る涙を勉めて隱さうと入道はして居た。

『京と云つたつて一人歸るのですから私の心はどんなに寂しいでせう。』

と云つて妻の泣くのを入道は道理だと思つて居る。京を出た時のうら若い昔を思つて尼妻を憐むやうに入道はぢつと見て居た。

『送つただけでもお父樣が來て下すつたら、ねえ、お母樣。』

と明石の君が云ふと、

『そんなことはよくない。』

と入道は打ち消して居たが、途中のことが氣に掛らないでもないらしい。

『私は播磨守をやめた時京へ歸らうとも思つたが、それきり發展することも出來ないで、地方官の古手だと後指を差されて居るやうなことでは親の名にも係ることではないかと氣が附いて出家してここ

に永住することに決めたのだ。それだものだから私が前に京を暇乞して出たのは浮世と別れる長い暇乞だつたのだなどと知人も皆云つて居たさうだが、功名心などと云ふものは自分ながらも思ひ切りよく捨てたものだと思ふ程だつたのが、あなたが少し大きくなつてくるに隨つて親の偏狹な心から暗闇に玉を置いて置くやうな無慘な運命を造つたと、始終私は我身を責めて、あらゆる神や佛にあなたの幸を祈つて居た。さうして居るうちに思ひ掛けなく源氏の君とあなたの緣が結ばれたので、嬉しいことだと思つて居ても身分の釣合はないために云ふに云へない氣苦勞をばかりして居た。然し可愛い姫さんまでも出來たのだから、あなたの幸運の道はもう安全に開けたものだと思ふから別れにくい別れをあなたとする。あなたは私のことなどは一切忘れるやうにしてお暮しなさい。私の方からも何も云つて上げない。私が死んだと聞いてもあまり歎かな

いで居て下さい。』

と入道は女に決然としたことを云ひながら、また、

『さうは云つても私は死ぬ日まで未練らしく姫さんのことを沸様にお願ひしてばかり居るのだらう。』

と云つて居た。船は八時頃にこの浦を出た。順風で豫定通りの時間で京へ着いたが、目立たぬやうにそつと大井の家へ入つた。家の造りも明石の君の氣に入つた。明石の浦に居るのと何となくよく似た此處の住居であるから所を變へたやうにも思はない。新しく建て加へた座敷なども趣がある。庭へ引いてある水の流れなども面白い。源氏の君は親しい家來を出張らせて新來の人に饗應をさせた。其處へ行く口實に困つてどうしようかかうしようかと紫の君へ氣がねして思つて居るうちに日が經つて行く。直ぐにも逢へることと思つた戀人がかうなのであるから女は却つて物思ひが加はつた樣な形で、なつ

かしい古郷をばかり思つて居た。源氏の君のかたみの琴を奥の座敷へ入つて彈いたりなどして居た。

かなしくも一人歸れる山里に聞きしに似たる松の風吹く

これは尼樣の詠んだ歌である。源氏の君は餘りの逢ひたさに、このためにどんなことが起らうとも好いと云ふ氣になつて、いよいよ大井へ行かうとした。

『桂村に建てさせた別莊へ私か行つて指圖してやらなければならぬこともあるし、私が訪ねてやる約束をした人もその傍に居るから其處へ行つたり、また嵯峨の寺の方へも廻つたりするから二三日歸りません。』

と源氏の君は紫の君に云つた。くはしい事は知らないが桂の院と云ふ處を造へて其處へ明石の君を呼び寄せて住ませてあるのであらうと紫の君は妬ましく思つた。

『歸ることなんかお忘れになつて長く行つておいでになるのでせうから、どんなに待遠しく私は思ふでせう。』

『またそんなことをあなたは云ふ。あなたと一緒になつてから私と云ふ者がまるで變つてしまつたと世間では云つてますよ。私程忠實な良人はありはしないのに、一寸したことを大層なことのやうに恨んだりしますね。』

こんなことを云つて紫の君の機嫌を取つて居るうちに大分遲くなつて、大井の家へ源氏の君の着いたのは夕方であつた。小い姫さんを見てこんな人を今迄見ないで居たかと思つて源氏の君は涙を零して居た。葵の君の生んだ若君を美しいと云つて世間で賞めはやして居るのは關白の孫と云ふ特別なことが光になるからでもあらう、これは自分の目で見てももうひとりとない美しい子だと源氏の君はおもつて可愛がつた。旅住居に寞れて居た時ですらも見たこともない秀麗な

男だと女は思つたのであるから、花やかな姿をした今の源氏の君の輝くやうな顏を見ては、長い間の心の暗い影も一時に消えてしまふやうであつた。立つて行く頃は容貌などの衰へて居た乳母も綺麗な若い女にまたなつて馴々しく明石の話などをする。

『よく辛抱をして居たね。』

と源氏の君は喜ばしさうに乳母に云つて居た。

『此處は餘り遠すぎるからね、來ようと思つてもつい大層になつて來られなくなるから、あなたのために造へて置いた東の院の方へ來てはどうです。』

と源氏の君が云ふと、

『此處に居て少し京の勝手になれてから參りませう。』

と明石の君は云つて居た。翌日は桂の院へ源氏の君が來ると聞いて近邊の領地の者などが出て來て、其處からまた此處へ來た。源氏の君

はそんな者などに云ひつけて庭などをよく繕はせなどして居た。
『少し手をさへ入れたならどんなにでも好くなる庭だけれど、そんなにしては此處から外へ移つて行くのが厭になつて、後まで氣が殘るから。私もそんなのだつた、明石は。』
などと昔のことも源氏の君は語つた。東の廊下の下を潜つて出る流のあんばいを好くさせると云つて下男に指圖して居た緣側に閼伽桶などの置いてあるのを見て、
『おかあさんは此處の座敷にお出でなんですか。氣が附かないで失禮な風をして居ました。』
と云つて早速源氏の君は上へ直衣などを着た。
『あなた方のお蔭で子供が大きくなりました。それに私がお願ひしたのでお住心地の好い處を捨てて此方へお越し下すつたことも濟まないと思つて居ます。お父さんはお父さんでお寂しく暮してお

出でなんでせう。お詫びしなければならないことばかりです。』
『私どもの苦勞は先から先からあなた樣がお察し下さるので喜んで居ります。』
と云つた尼樣は嬉しさうであつた。
『お姫さんもどうなりますことかとお案じして居りましたが、もうお父樣のお手にお歸つたやうなものですから安心で御座います。唯お生みした母が人樣並の身分で御座いませんことが御運の障りにならないかとそんなことを思つて居ります。』
とまた云つた。物越しの上品な人である。源氏の君も打ち解けて昔この家に居られた親王のことなどを話し合つた。それから源氏の君は寺の方へ一寸行つて、また此處へ歸つて來た頃には好い月夜になつて居た。月を眺めて昔のことが悲しく胸の中を往來する時、女は默つてかたみの琴を源氏の君の前に置いた。

『同じ音がするでせう。ねえ、少しも變らないでせう。それでもあなたは疑つたでせう。』

と琴を彈いた後で源氏の君は云つた。

『變らないと云ふお約束を眞實だと思つて居ればこそ來たのですわ。』

かう云つて居る女の樣子がふさはしく源氏の君に見えるのは、この人の容貌の德とでも云はねばなるまい。源氏の君は姫さんを何時迄見ても見飽かないやうに眺めてばかり居た。日蔭者で大きくなるのが愍然でならない。二條院へ伴れて行つて紫の君の子にして育てたなら、それだけでも世間の思わくが違ふかも知れない、さうしたいものだと思ふのであつたが、引き離すなどと云ふことが云ひ出せるものでないとも思つた。姫さんは初めは耻しがつて居たが、今日はもう馴れて物を云つたり笑つて見せたりする。抱かれてもぢつとして居る。そ

のまた翌朝は少し朝寢して此處から直ぐ立つて歸る筈であつたが、京から桂の院へ源氏の君の後を追つて大勢客が來て居て源氏の君は是非其方へ行かねばならなくなつた。迎へのためにこの家へ來た人などもある。源氏の君は少し面目ないやうにも思つた。出て行かうとすると乳母が姫さんを抱いて來た。源氏の君は子の髮を撫でながら。

『遠いからお父樣は始終見られないね。』

と云つて居ると、

『とてもお目に懸れませんでした時よりも、此方へまゐつてお逢ひが出來ませんやうでは却つて氣苦勞は多う御座いませう。』

と乳母は女主人のことをそれとなく云つた。

『奥樣はなぜ此處まで出て來ないのだ。別れを惜んででもくれない

と私は人心地もつかない。』

かう源氏の君が云つたのを、乳母はわらひながら明石の君に云ひに行

つた。すすめられて見送りに來た女の品のある美しさは何々内親王と云つても好いやうに見えた。源氏の君の立つた跡へ太刀をもらひに來たのは明石へ來て居た前の右近將監である、明石の君が此處に居るらしいのを見て、縁側へ手を突いて、

『以前御厄介になりました右近將監で御座います。此方へおいでになりましたことは承知して居りましたが、折が御座いませんでお伺ひもいたしませんでした。』

と云つた。

『知つた方のあまりない處へ來たのですから前のお馴染の方は頼もしく思ひます。』

『また改めて。』

と云つて立つた。心の中では、女は何處まで出世するか知れないものだなどと思つて居た。

『皆今朝暗いうちに京を出て參つたのです。草花は丁度見頃ですが嵐山の紅葉は少し早いやうですな。』

『連中の中で鷹狩を初めた者もあります。』

と一緒に車に乗つた人達が源氏の君に云つて居た。

『一日ゆつくり遊んで行き給へ。』

その人達にかう云つて源氏の君は俄に桂の院で饗應の支度などを家來にさせた。狩好の若い人達は云ひ訣ほどの小鳥を萩の枝などに附けて歸つて來た。晝の間は詩を作りなどして居たが、夜になつてからは多勢で管絃の合奏などをして遊んだ。大分更けてからまた四五人の若い官吏が來た。源氏の君が桂に行つて居ることを今夜お聞きになつた陛下の、

秋の夜の桂の里をながめつつ心足るべしもち月のごと

うらやましとお書きになつたお文を持つて來たのである。勅使に出

す贈物などが用意してなかつたので、そんなものがあつたらと云つて大井の家へ取りにやると、彼方からはこの中にお聞に逢ふものがあつたらと云つていつぱい詰めた衣櫃を二掛も遣した。

久方の光に近き名のみして朝夕霧もはれぬ山里

源氏の君のお返しの歌はこんなのである。そのうち此處へ行幸を仰がうと源氏の君は思つて居た。翌朝桂の院を立つて行く一行の賑かな笑聲などが風に交つて聞えるのを明石の君は寂しい心持で聞いて居た。二條院へ歸つた源氏の君は別莊のことや寺のことばかりをいろいろと紫の君に話した。

『二日で歸らうと思つたのが三日にもなつたのであなたに濟まないとばかり思つて居た。大勢そんな人達が來て酒を飲んだり大騒ぎをするものだからよく寢ることも出來なかつた。』

と云つて、源氏の君は紫の君の機嫌の惡いのに氣が附かないやうな振

りをして晝寢をして居た。

『あなたはまだ怒つて居るの、あなたの競爭者でも何でもないつまらない女ではありませんか。自分はえらい者だとずつと心を高くお持ちなさいよ。』

またこんなことも源氏の君は云つて居た。夕方になつて參内する前に源氏の君が隱れるやうにして手紙を書いて、家來に耳打ちして持たせてやつたのを見て、

『氣の多い方。』

『餘程お氣に入つた方と見えますね。』

などと女達は云つて憎がつて居た。その晩は宮中でお泊りする方が好いのであるが紫の君の機嫌の直つてなかつたのが氣になつて歸つて來た。其處へ使が明石の君の返事を持つて來たので、隱すことも出來ずに紫の君の傍で源氏の君はその文を讀んだ。別段見ても腹の立

つやうなこともないので、

『破つてしまつて下さい、女の手紙なんかを其處らへ散して置くのは もう似合はない年になつた。』

と云つて其處へ置いた。心の中では戀しくて戀しくて堪らなく思つて居る。物も云はないで脇息にもたれたままぢつと灯を見て居た。風で廣がる文を見ようとも紫の君のしないのを、

『見ないやうにして見て居るのは人が惡い。』

かう云つて源氏の君は笑つて見せた。そして傍へ寄つて、

『眞實はね、可愛らしい者を見て來たので、どうしようかと思つて居るんです。あなたも一緒に考へて下さい。育ててやる氣はありませんか。四つになつて居るのです。憎いと思はないのならさうなると一番好いが。』

と云つた。

『人のことを憎むだらうと直ぐあなたは仰しやるから、私は默つて居るのです。私は子供のやうな人ですから小い人の相手にはなれるでせう。眞實に可愛くなつていらつしやるのでせうね。』

紫の君はにこやかな顏をして云つた。大の子供好であるから。此處へさうして引き取らうかなどと源氏の君は思ふのであつたが、また明石の君の心持も察せられて、さう決めて畢ふことも出來なかつた。毎月十四と五の日には嵯峨の寺で念佛があるので、それをかこつけに大井の家へ行くのであるが何時も待遠しくてならない。

薄雲

冬になるに隨つて河に近い大井の住居は堪へられないほど寂しくなつて來た。立木や建築物にひどく當る風を聞いて心が始終落ち附かない。

『これでは住んで居られないだらうから、思ひ切つて東の院へ移つて來たら好いでせう。』

と源氏の君は云ふのであつたが、近い所へ行つて月に一度二度より訪はれぬやうな事であつたなら、今よりも一層見じめなものであらうと云ふやうな氣のする明石の君は、

『もう少し辛抱して此處に居ます。』
と云つて居た。
『あなたが當分此處を動かないと云ふのなら、姫さんだけを二條院へ伴れて行つたらどうだらう。袴着の祝なんかも京の中で立派にしてやりたいと思ふから。それに家のも姫さんのことを聞いて居るものだから、見たい見たいとばかり云つて居るのです。うちのに馴れさせて彼の子にさせてやつても好いだらうと思ふのだが。』
源氏の君がかう云つた時、女ははつと胸を騒がせた。源氏の君にその考のあることは以前から察せられて居たのであるが、いよいよ云ひ出されて見ると、同情の少い冷い心が恨めしい。
『立派なお母様に育ててお貰ひしましても、眞實は誰が生んだのだなどと却つて悪く云はれませうから。』
放さうとは明石の君は云はない。

『繼母に掛けるのはどうだらうと云ふやうな心配は決してしないでもいいのだ。長く添つて居るのだけれど、一人も子供が產れないのだからね、寂しがつて前齋宮などと云ふ大きい人を子にして、世話などして居る位だからね。この可愛らしい子を決して疎かにしたりする氣配はない。』
と云つて源氏の君はそれからいろいろと紫の君の好い性質を話しなどした。昔の源氏の君は誰が妻になつて修るのであらうと危ぶまれた人であつたのが、紫の君と一緒になつてからは生れ變つたやうな堅い人になつたと聞いたが、やつぱりそのひとにえらい處があるに違ひない。源氏の君がこんなに自身の口から云ふのでも知れて居る。そんな人と愛を爭ふことも出來る自分ではないのに、表向の妻の一人だと云つてその近傍へ行つて憎い女だとおもはれてもつまらない。自分はどんな目に逢つても好いとして、子供までが勢力のある繼母に憎

まれるやうなことになつては行末が可愛さうである。そんなことを思ふといつそ今のうちに其方へ遣つてしまつた方が好いかも知れぬと明石の君は思つた。それと一緒に始終氣にかかるであらう、寂しい時の慰めものがなくなつたらどうであらう、源氏の君が偶にでも出て來るのは子が可愛いからでもあらうから居なくなつては見向かれもしないやうになるであらうかなどとも思つて、それからは毎日くよくよと考へ込んでばかり居た。尼樣は賢い女であるから、

『見ることが出來なくおなりなのは、私達には苦しいことだらうけれど、まあ何を考へねばならないかと云ふと、姫さんのためと云ふことを考へなければならないのだからね。お父樣だつて一寸した根底でそんなことを仰しやるのぢやないとおもふ。人と云ふものは母親次第なのだからね。源氏の君のやうなあんなえらい方で、お父樣の御愛子でいらつしつたのでも、更衣腹だと云ふので天皇樣にもお

なりになれなかつたのだからね。まあその外の親王樣のお子大臣のお子と云つても、兄弟の中で母親の惡いお子は輕蔑されるのだからね。世間がさうだと父親の心もやつぱりさうなるからね。殊に源氏の君は幾人も立派な御身分の奥樣がおありになるのだから、そのうちに誰方かに女のお子が產れて御覽、このままだと姫さんは見じめなものになりますよ。袴着の式なんかもいくら立派にしてもこんな片田舍では見てくれる人も何もありはしない。それよりも二條院の奥さんの子にして貰つて、大切にされて居る話などを聞くのを樂みにして居る方が好いだらう。』

と女を諭すのである。占ひをさせても二條院へ行く方が好いと云ふので明石の君は當惑して居た。源氏の君も無論さうしたいと思ふのであるが、女の心中が思ひ遣られないこともないから强ひてすすめない。袴着の式はどうするかと訊いてやつた返事に、

何ごともかひなき母のかげにあることの行末かけていとほしく候へば、かねて仰せ給ひしやうに御はからひ給はり候ことを祈り候。ひなびしさまの子のきらやかなる御處にまじり候はんことに唯心おかれ申し候。

と云つて來た。この心をしほらしく源氏の君は思つた。善い日などを暦で選つて、來た時の用意などを二條院ではさせて居た。辛いこと悲しいことと思ふが、子のためと思つて明石の君は忍んで居た。友達のやうにして貰つて居た乳母はこの人と別れて知らぬ人の中へ行くのを歎いて居た。十二月になつて雪や霰が毎日のやうに降る。澤山に積つた庭の雪景色を見ながら零れる涙を拭いて、

『眞實に手紙を始終頂戴よ。何時まで經つても變らないやうにね。』

と明石の君が云ふと、

『はい。』

と云つて乳母も泣いて居た。この雪が少し解けた時分に源氏の君が來た。何時もは待つてばかり居る人なのであるが、姫さんを迎へに來たのかと思ふと明石の君は味氣ない胸騒きがした。自分の心次第なのであるから、厭と云へば强ひてとも源氏の君の云はないのも知つて居るが、そんなことを云つて氣の決らない女だと思はれるのが耻しいと思ひ返して居た。この春から伸す髪が肩の邊でゆらゆらと動いて、美しい目をしたこの子を他人の子にしてしまふ母親の心の苦しさを思ひやつて、一晩中いろいろと源氏の君は慰めるのであつた。

『私は滿足して居るのですよ。』

と云ひながら忍び切れずに泣くのが源氏の君には感然でならなかつた。お父樣に連れて行つて貰ふのだと行つて、姫さんは大喜びで、

『車に早く乘りませうよ。』

などと云つて居る。車の處まで母親が抱いて出た。

『母様も早くお乘りなさい。』
と云つて姫さんは袖を引く。
『いつ母さんはまたあなたを見られるだらう。』
と云つて明石の君はわつと泣いた。苦い經驗を嘗めると源氏の君は思つた。乳母と少將と云ふ女が隨いて行つた。姫さんは途中で寢てしまつた。抱き下されても泣きなどはしなかつた。小い手道具などを置いて用意してある西座敷で菓子などを食べて居るうちに姫さんは母親の居ないのが氣になりだした。其處らを見廻して仕舞には恐いものに逢つたやうな目をして隅の方でぢつとして居た。源氏の君は紫の君と思ひ合つた夫婦の中へこんな可愛らしい子も伴れて來て、圓滿な家庭がいよいよ幸福の多いものになつたやうにも思ふのであるが、なぜ眞實にこの人の腹から生れて來なかつたのかと折々は思つてもかひのないことを思ふこともあつた。當分の間は母とか祖母と

か居ない人を戀しがつて泣くこともあつたが、心の穩かな子であるから案外早く紫の君に馴染んだ。紫の君は美しい寶物を手に入れたやうに思つて、抱いたり遊んでやつたりして嬉しがつて居る。もう一人乳母も雇ひ入れた。大井の方では明くれ戀しいにつけても、ことわることの出來なかつた自分の氣の弱さを後悔もして居た。尼さまもよく泣いて居るが姫さんが紫の君に可愛がられて居ることなどを聞いては喜ばずには居られなかつた。十分にしてそだてられて居る姫さんにその上着物などを拵へて送るのは失禮だと思つて、乳母や少將の着物だけを何かと氣を附けて送つて居た。子が其處に居なくなつたから來ないと思はれるのが辛さに忙しい中でも勉めて源氏の君は大井を訪ねた。紫の君は今はもうそれほど妬しがりもしない。美しい子に免じたとでも云ふのであらう。東の院の花散里の君は、自身のことは云ふまでもなく女達や童の姿なども何時もきちんとさせて品よ

く暮して居る。近い德には暇のある時などはよく源氏の君が來て居た。泊つて行くなどと云ふ事は殆どない。自身はこれだけの運の女だと諦めて妬んだり恨んだりすることのない人であるから、源氏の君もこの人のために心を使つたりすることのないのを喜んで居た。そして紫の君に餘り落さない待遇をするから、下の者も侮るやうなことはしない。同じやうに源氏の君の家來達も出入して居る。源氏の君は正月で何かと事の多かつた日が少し經つてから、また明石の君に逢ひに行かうとした。殊に美くしい着物を着重ねて、薫物を袖に薫き籠めたりして出て行くのを紫の君はぢつと見て居た。後を追ふ姫さんに、

『父樣は明日直ぐ歸つて來ますからね。』

などと源氏の君は云つて居た。紫の君は氣を更へて、姫さんを呼んで膝の上へ置いて、

『母樣のお乳を上げませうね。』

こんなことを云つて戯れて居た。眞實のお母さんはどんなに思つて居るだらう、自分であつたなら戀しくて戀しくてならないだらうなどとも思ふのであつた。明石の入道もこれから後のことは一切知らないと云ふやうなことも云つたが、さうもならぬか始終人を遣つて京のたよりを聞いた。一月も源氏の君が見えないと聞いて膽を冷すこともある。また話を聞いて飛び立つやうに嬉しく思ふこともあつた。源氏の君の舅だつた關白が死んだ。六十七であつた。誰も誰も惜しがつて悲しんで居た。今年はこの外にも死ぬ人が續々あつた。彗星が出るなどとも云ふ。女院が春の初めから御病氣に懸つて居られたが三月になつてどつと重くおなりになつたから陛下が三條の宮へ行幸になつた。父帝にお別れになつた頃はまだ御幼年であつたから、それ程悲しいともお思ひにならなかつたのであるが、母女院に萬一のこ

とがあつたらと陛下の非常に心配して居られる御樣子が誰にも見えるので女院はお可愛さうにお思ひになつた。

『今年は私の年が惡い年に當つて居るのですから、早くからその用心をして祈禱などをさせたら好かつたのですけれど、私がそんなことをすると大騒ぎになるものですから捨てて置いたのですよ。參內して昔の話などをゆるりと申し上げたいと思つて居ながら、ついよくない續きなものでしたから。』

と切なさうな息をおしになりながら女院が云はれた。お年は今年三十七におなりになる。けれどその年よりもずつとお若々しいお姿であるのに、もう頼みのないもののやうに命を思つて居られるのが陛下にはお悲しい。この頃は方々で祈禱をさせておいでになるのであるが、惡いお年だと思ひながら御病氣をいつもあることのやうに思つて早くからその運びをしなかつたと陛下は殘念にお思ひになつた。陛

下のお身であらせられるからゆるりとお枕元においでになることも出來ないで、直ぐお歸りになるのであつたが、お心の中は傷ましい思ひで滿たされてお出でになつた。女院は御自身のことを始終滿足しておいでにならなかつたが、后腹の皇女に生れて后に立つて、陛下の御母になつたのであるから自分のやうなものこそ、人から云ふと最上の幸福な人かも知れぬなどとお思ひになるやうになつたが、源氏の君の子であらせられると云ふことを陛下が夢にもお知りにならないのをその儘にして死ぬと云ふことだけが心の結ぼれがのこるやうに思つてお出でになつた。祈禱などにある限りの手を盡して居る源氏の君の心の悲しさ苦しさはまた一通りのものではない。今一度初戀の昔から云ひ盡されなかつたことをしみじみと話したいと思つて居たが、もう望のないことになつたとも思ふ。女達に御容體を聞くと、

『お弱いお身體で佛樣のお勤めを少しもお休みにならずに續けてお

いで遊ばしたものですから、段々お惡くなつてまゐつて、この頃では果物さへも召し上りません。』

と云つて、話して居る者は涙をそつと拭いた。

『陛下のおためになるやうにとばかりして居て下さいました何かの御恩返しをしたいと思つて居ましたが、そんなことも出來ずじまひになつてしまひました。』

と源氏の君に云へと取次のものに女院が敎へておいでになるのが少しづつ聞えて來るので、源氏の君は御返事も何も出來ないで泣いてしまつた。間もなく女院は灯の消えるやうな靜かな往生をされた。百官が皆喪服を着た悲しい春である。二條院の庭の櫻を見ても源氏の君は女院の御全盛時代にあつた花の宴のことなどが思ひ出される。人に見られるのを憚かつて、一日持佛堂を出ないで泣いて居ることもあつた。花やかな夕日がさして、木の枝などがはつきり繪に描いたや

うに見える上に、灰色の雲が漂つて居るのが哀な心によく合つて居るやうに思つて眺めて居た。

いにしへを戀ふる心につくるなく湧く思ひにも似たる雲かな

源氏の君はこんな歌を口誦んだ。女院の母后の時代からの祈禱僧であつて、社會からも尊敬を受けて居る人がむつた、七十程の老年であるからもう山の寺に籠つて出ないと云つて居たのが女院が崩御なつたので京へ出て來た。陛下も信仰して居られる人であるから宮中へもお召になつた。そして昔のやうに陛下の御守護僧になれとの仰があつた。源氏の君もすすめるのでその人は老體を毎夜宮中へ運んで居た。ある日の曉御前には外の人も居ない靜かな時である。老僧は陛下にいろいろなことをお話申し上げて居たが、

『誠に申し上げ憎いことで却つて陛下が私をお憎みになる樣な結果を見るかも知れないことで御座いますが、知つて居てお耳に入れな

いで死にましては佛樣も私を腹黑な者だと思し召すかと思ふことが一つ御座いまして。』

とこんなことを云ひ出したが、後の言葉が久しく出ない。

『何なのだ。私は小い時からおまへを心安い者だと思つて居るのに、そんな隔てがましいことを云はれると嬉しくない。云つて御覽。』

『然し一大事なことで御座います。お崩れになつた陛下、女院、また源氏の大臣のために却つてよろしくない事とも存じますが、思ひ切つて申し上げます。陛下が女院のお腹にお宿り遊ばした時から、女院には深い御心痛がお出來になつたやうで、しきりに御祈禱をおさせになつたことが御座います。源氏の大臣が寃罪で御處罰をお受けになつた時も非常にまたお恐がり遊ばして、そのときも私に祈禱を御せ附けになりました。そのことを大臣がお聞きになつて一層烈しく祈禱をおさせになりまして、陛下がお位におつきになりますまで祈禱をおやめさせにならなかつたやうな事實も御座います。』

と云つて、それから老僧は女院と源氏の君との關係について、知つただけのことを陛下に申し上げた。陛下は餘りに意外なことをお聞きになつて恐しくも悲しくもさまざまにお心をお亂しになつた。お返事も遊ばさないのを見て、御不興なのかと老僧は恐れて退出しようとすると、

『まあ暫く。』

と陛下はお云ひになつた。

『よく云つてくれた。今迄云つてくれなかつたのが恨めしい程だ。おまへに聞くがまだ外にこのことを知つた人があるか。』

『それは王命婦と私の外には指の先程も知つたものは御座いません。それほど秘密だつたことで御座いますから、一層私が陛下に申し上げる責任があるやうにも存じたので御座います。尊貴な方が續い

ておかくれになつたり、彗星が出たりいたしますのもこのためでは御座いませんでせうか。御幼年であらせられた頃はそれでも濟んだので御座いませうが、陛下がお一人前にならせられたのに父君を父君とも御存じにならないでおいでになると云ふことが、神のお怒に觸れて居るかも知れぬと私は存じます。』

泣きながらこんなことを申し上げて居る間に夜がすつかり明けたので老僧は退出して行つた。思へば思ふ程この事を夢のやうに陛下はお思ひになるのであつた。故上皇のためにも濟まないことであると お思ひになり、また源氏の君を父でありながら臣として仕へさせて置いたのが濟まないともさまざま御煩悶をされた。それから寢所へお入りになつたままその日は晝になつてもお出ましにならないと云ふことを聞いて、源氏の君は玉體にお障りがあるのではあるまいかと驚いて參内した。陛下は源氏の君のお顏を御覽になつて涙をお零しに

なつた。源氏の君はまた女院のことを思ひ出しておいでになるのであらうとおつて居た。この日は桃園の式部卿の宮がお薨れになつたと奏聞された。老僧の云つた神の怒りと云ふことをつくづくと陛下はお考へになつて居る。世間の物騒しい折であるから源氏の君は幾日も自邸へ歸らずに宮中に留まつて居た。

『位を讓つて私は氣樂な身になりたいとも思ふ。こんなことを陛下がお云ひになることもあつた。そんな時には源氏の君は極力お諫めをした。陛下も源氏の君も黑い同じやうな喪服を着て居られるために一層よくお似になつて見える。同じお顏を二つ置いたやうでもある。陛下は今迄も鏡を御覽になつては源氏の君によく似た顏であるとお思ひになることもあつたが、老僧の話をお聞きになつて以後は、さう思つて御覽になるせいか、御自身と寸分の違もないなどとお思ひになつて源氏の君を見て居られるのであつた。老僧

に聞いたことを云つて見たいとお思ひになるのであるが、若い陛下はお耻しくて口へお出しになることが出來なかつた。何によらず丁重にものをお云ひになる御樣子などが以前とは違ふので、心の敏い源氏の君は怪しい現象であると思つたが、そんなにくはしいことまでも陛下がお聞きになつたとは想像しなかつた。陛下は王命婦にもなほくはしく聞きたいとお思ひになつたが、女院が飽くまでも隱しておいでになつたことを、知つたとはあの人にも思はれまいとお思ひになつて、そのことは思ひ留つておいでになつた。唯源氏の君にだけはどうかして話したいと思つておいでになる。こんなことが外國の例にあるかと聞いて見たくもお思ひになつたが、それも云ひ憎いので、お一人であらゆる書物に目を通すことに勉めておいでになつた。皇子であつて人臣に列して、後に親王になつて即位されるやうなこともあるのをお知りになつた陛下はさうして源氏の君を位につかせようかなどと

もお思ひになつた。秋季の官吏の交代期に太政大臣に源氏の君を任命しようと思ふと云ふ御内意をお傳へになつた序に、陛下はさうして後には位も讓りたく思ふと云ふやうなことをお漏しになつた。意外なことに源氏の君は暫くはお返事の言葉も出ない程であつたが、

『お崩れになりました陛下が、大勢の皇子の中で特に私を愛しておいでになりながら思召があつて位はお讓りにならなかつたので御座いますから、私は故陛下のお心通りにかうして居るのが本意で御座います。そのうち少し年をとりましたなら昔からの望み通りに出家したいと存じて居ります。』

とやつと申し上げた。陛下はお心がよく源氏の君に通らないのを殘念にお思ひになつた。太政大臣も辭退したので、陛下は位階だけを從一位にお進めになつた。親王になれとお云ひになるが、さうなれば關白をする人がない。權中納言は大納言になつて右大將を兼ねて居る

が、この人が大臣になる時が來たなら關白を讓つて親王になることをお受けしても好いと源氏の君は思つて居た。併し陛下がこんなに立入つていろいろのことで自分のためにお心を遣はれるのは理由がなくてはならないと思つて、今は女官の中での隱居役のやうな閑散な職に居る王命婦を訪ねた。

『昔のことを女院のお口から少しでも陛下にお話しになつたやうなことがあるでせうか。』

『女院樣がお話しになつたと云ふやうなことは思ひも寄らぬことで御座います。陛下のお心に苦勞の種をお蒔きになるやうなことは斷じて遊ばさないで御座いませう。』

と云つて王命婦は首を振つて居た。それもさうであると思つて源氏の君は歸へつて來た。梅壺の王女御は巨大な後援者のために後宮での勢力は並ぶ者がない。陛下の御寵愛も深厚なものである。王女御は

それに相當した美くしい人格を持つて居られるから、源氏の君はあらゆるお世話を快くした。秋になつてから暫く宮中を出て二條院へ歸つておいでになつた。草の花などの亂れて咲いた上に秋の雨がしとしと降つて居る景色の哀れなのを見て、死んだ戀人のことなどを思ひながら王女御の御殿へ源氏の君は來た。まだ喪服を放さない珠數を片手で持つた艶な姿で簾の中へ入つた。王女御は几帳だけを隔ててお逢ひになるのであつた。

『悲しいことの多い年であるのに、草花などだけは何時もの秋に變らないで咲いて居ます。』

と云つて柱にもたれておいでになる源氏の君の御樣子は繪に描いたやうである。昔のことなどを云つて、野の宮へ六條の君を訪ねて行つた時の悲しかつた別なども語つた。戀しい母君のことを源氏の君のお云ひになるので、しのびやかに女王の泣いておいでになるのが美し

い趣のあることに思はれて身體を少しお動しになるのがなまめかしい柔かな響に聞える。まだ若い血の失せない源氏の君は胸騒ぎがしきりにする。

『戀と云ふもののために私はしないでも好い苦勞をどれだけしたか知れませんが、その中でも二つの重いものが未だに心からとれません。その一つはあなたのお母樣との戀です。私を恨めしい者だと思つたままでお死にになつたのを始終殘念に思つて忘れられないのです。』

と源氏の君は云つた。もう一つのことは何であるとは云はなかつた。

『私が一時逆境に居ました頃いろいろと苦勞をさせた女達にも、それぞれ安心をさせることがこの頃になつて出來ました。東の院に居る家内なども隨分苦勞をした女ですが、この頃では心配は何もなくなつたと云つて居ます。私は位置や名望をとり返したことよりも

これが一ばん嬉しいのです。まあ戀の奴のやうなものですね。あなたをお世話申して居るのも權勢を張るためでも何でもない。』

こんなことを源氏の君が云つたのであるから、返事のしやうがなくて王女御が默つておしまひになつたので、源氏の君も氣が附いて外のことに云ひまぎらせた。柔かに少しづつものをお云ひになる女王の御樣子が身にしんで、何時までも源氏の君は傍に居たい氣がした。日もとつぷりと暮れた。

『私はこの頃理想を實現した家を建てたいと思つて居るのです。春の庭秋の庭と云ふやうなものを拵へる積りですが、あなたは四季のうちで何時がお好きですか。』

と源氏の君は云つた。王女御はためらひながら、

『私は何だか秋が好きなので御座いますよ。』

とお云ひになる言葉の調子の愛らしさに、源氏の君は忍び切れずに、

『秋の身にしむやうな時がお好きなのだつたら、私の苦しい心にも同情が出來るでせう。どんなに長い間の片戀でしたか。』

こんなことを云つた。王女御がこれにお答へになる筈もない。源氏の君はまだそれから苦悶の大きかつたことなどを話するのであつた。氣の上つた儘に几帳の中へ入ることも爲かねなかつたのであるが、王女御が悲しんでお出でになる樣子を見ると道理であるとも思はれ、理性で判斷をすればあるまじき事だとも考へられたので、心も姿もしほしほとして居た。少しづつ身體を引いて王女御は奥の方へお入りになつた。

『こんなお話をしたのをお憎みにさへならなければ好いのです。』

と云つて源氏の君は歸つた。西御殿へ來ても紫の君の傍へも行かずに緣に近い處にぢつと坐つて燈籠などを軒に吊らせて泣きたいやうな心を紛らして居た。その翌日は平生よりも一層親らしく王女御の

世話などをやいて居た。紫の君に、

『あなたは春が好きであつて、王女御が秋をお好きなのも面白いから急に皆の好み通りの家を造へようと思ふ。』

などと源氏の君は云つて居た。また大井へ行つたが、この頃は暇でもあつたので少し長く滯留して居た。

●槿

朝顔の君は父の式部卿の宮の喪で齋院を辭した。一端思つたことは忘れてしまふことの出來ない源氏の君であるから、いましめの檻の中から戀人が出て來たやうに思つてまた毎日のやうにこの人へ手紙を書いた。それは父に別れた當座の寂しい思に同情してやつたり慰めたりするのであつたが、戀を訴へた以前のやうな手紙を送られる導火線になつてはならないと思つて、朝顔の君の方からは餘り返事もしないのである。九月になつて桃園の宮へ歸つたと聞いて其處には自身にも叔母に當る五の宮も居られるので、その訪問にかこつけて源氏の

君は出掛けて行つた。五の宮は獨身でお通しになつた内親王で、甥の皇子達を子のやうにお愛しになるものであるから、源氏の君も懷かしがつて居た。一つの御殿の東座敷西座敷に別れて年取つた獨身の皇女と若い一人身の王女は住んで居られた。式部卿の宮がお薨れになつて何程も經たないのに、家の中がもう目に立つて荒れたやうで心細い。源氏の君の來たのをお喜びになつて、ごほんごほんと咳をしながら宮はお話しになる。姉君ではあるが太政大臣の未亡人の宮は艶な若い日の面影が殘つて樣子が柔かで男の心を引く力も失せておありにはならないやうであるが、この宮はそんなことは微塵もない。乾枯びたお聲はお年以上などんな老人かと思はれる程である。

『陛下がお崩れになつてからと云ふものは心細くて泣いてばかり居るのに、ここの兄にもまた死なれてな。』

と宮は云つてお泣きになる。

『長命をするからこんな苦にも逢ふと思ふことが多いがな、あなたのことを思ふと位をとられておいでだつたあの中途で死なかつたので好かつたと思ひます。』

聲を震はしてかう云つてお出でになつたが、直ぐまた、

『美しいなあ、あなたは。小い時私が初めて見た時な、こんな人が人間界に生れたのかと屹驚したものだよ。今の陛下があなたによく似てお綺麗ぢやと云ふ人があるけれど、私はお目に懸らんけれど何と云つたとてあなた程お美しいことはないだらう。』

こんなことをお云ひになつた。云ふ人も滑稽であるが、面と面つて賞められて居る自分も滑稽であると源氏の君はをかしく思つて居た。

『私は田舍へ行つたりしてゐます間に見苦しくなつたと自分でも思ひますが陛下は實にお綺麗なものですよ。あんな陛下は過去にも未來にもないでせう。あなたの推測はまちがつて居ますよ。』

と源氏の君は云つた。

『さうかえ。さうかえ。』

と宮は云つて居られた。

『時々お目に懸れたら命も延びるだらうがなまあ然し陛下はしようがない。同じ叔母でもあなたを婿にしたので今でも家の人のやうにしておいでになる姉が羨しい。死んだ兄もあなたを婿にするのだつたと云つてつくづく後悔してました。』

かう宮がお云ひになつたので、源氏の君は胸を騷がせた。

『さうなつて居ましたら私も嬉しかつたでせう。伯父の宮様もあなたもそんなことはちつとも私に云つて下さらなかつたので。』

と恨めしさうに云つた。ふと彼方の庭の草花などの枯れ枯れになつたのが目に入つて靜かにそれを見て居る美人を想像すると溜らず戀しくなつて、源氏の君は五の宮にそこそこに挨拶して、縁側傳ひに西座

敷へ行つた。黑い縁をとつた御簾に黑い几帳が添へて立ててある間から炷いた香の匂ひが漏れてくるのが一種のなまめかしいなつかしい趣がある。縁側へお坐らせするのも失禮だと云つて源氏の君を外側の座敷へ通した。

『他人の客のやうではありませんか、長い間變らずにお見せして居る志のかひもない。』

應接に出た女に源氏の君はかう云つた。

『父が亡くなつた家に歸つて見ますと、前のことは皆夢だと云ふ氣ばかりしかいたしません。あなたにお禮を申さねばならないことがありますなら、また氣が靜かになつてから申しませう。』

と朝顏の君はまたその女に云はせた。

『神様を口實になすつて私を追拂ひになることももう出來ないでせう。千分の一萬分の一でも今迄思つて居たことを直接にお話した

いのです。神様はもうあなたとどんな戀をしても好いとお許しになつたやうなものです。』

『さうではないでせう。私が神様にお仕へして居る間普通のお交際をして下すつたのですから、私とあなたとはさう決つた男女だと神様が思つていらつしやるのに、今になつてそれ以上な戀のやうなことをしたら神様がお怒りになるでせう。』

『神様はそんなに戀がお嫌ひでせうか。戀をやめさせてくれと業平が云つたのにお聞きにならなかつたのは神様でせう。』

こんなことを女達に取次がせて雙方で云ひ合つた。逢ふことを勸める者があつても朝顏の君は聞かなかつた。

『もう二十年近くも成るだらうと思ふと、そしてまだはかない戀を續けて居るのだと思ふと味氣なくなります。』

と云つて歸つて行つた源氏の君の美しいことを皆が賞めそやした。

あの人は昔から淺はかな思ひで戀をして居られるのではないといろいろな證據を上げて女王に云ふ者もあつた。態々行つたかひもなしに歸つて來た源氏の君は味氣ない思ひが胸に滿ち滿ちして眠ることもその夜は出來なかつた。戸を早く開けさせて霧の降る庭を眺めて居たが、外の草に這つて哀れな姿に咲いた朝顏を折らせて、それを文と一緒に朝顏の君に送つた。

あるかなきかの朝顏の花を、わが耻しき三十路の姿によそへて給はりしにつけても悲しき心地の多くいたし候。

返事はこんなことを書いたものであつたが、源氏の君は何時までも何時までもぢつと眺めて居た。女を動かさうとする手紙を書くのに苦心するやうなことも今は不相應な年になつて居ると思ひながら、源氏の君は骨を折つて手紙を作つて居た。紫の君の傍へも行かずに東御殿に居て、前齊院家の宣旨の局を車で迎へにやつ

て、戀の成功を助ける味方にしようとしたりなどして居た。昔でさへもさう云ふ氣にならうとしてもなれなかつたのであるから、三十になつて今更戀に醉ふのなどと云ふことは思つても出來ないことであると朝顏の君は思ふのであつた。もう手紙の返事も一切書かないで居る方が源氏の君の心の熱を醒まさせるのに好いかも知れぬなどとも思つて居た。女は誰でも自分には靡くものと思つて居た源氏の君はいよいよ心をいらだたせて居た。それがもう世間の評判に上つて、前齋院を手に入れようとする爲に源氏の君は五の宮に親切を盡して居るなどと云ふ。これが紫の君の耳にも入つた。當分のうちはそんなことはあるまい、さうだつたなら打ち明けた話を自分は聞く筈であると思つて居たが、遂には噂を否定することが紫の君に出來なくなつて來た。見て居ても魂が身に添つて居ないやうなことがある。話をして居てとんでもないまちがつた返事などをされて悲しい時がある。

同じ女王と云つても朝顏の君は齋院にまでなつた人で、世間から尊敬されて居ることは自分の比ではない。その人に源氏の君の心が移つてしまつたなら自分は哀れなものであると紫の君は歎いて居た。源氏の君の妻として並ぶ人のない愛を負つて立つて居た人であるから侮りにくい競爭者らしい人を見ては地位の動搖するのを憂ふるのも道理である。捨ててしまふやうなことはなくても、情人の一人として輕んじて見られるに至るであらうと思ふと堪へがたい。明石の君のことなどは自身に强身があるから、かれこれと云つて男の云ひ訣を聞くのも慰みの一つになつた、そんな場合ではないひしひしと身に迫る悲しい恨めしい事は却つて口へは出ない。默つて知らぬ顏を作つて紫の君は苦しい胸を被つて居た。參內して宿直所に泊つて二條院に歸らぬことが多くなつて、家に居ても文ばかり書くのを役目のやうに源氏の君はして居る。紫の君は一寸でも自分に漏してくれたならと

思ふが、そんなこともしてくれない。冬になつても國母の喪中である今年は、行はれる神事儀式もない暇さに五の宮の訪問ばかりを源氏の君はした。雪の降る日の夕方、また外出の着物に香を薫きしめて居る源氏の君を傍に見て居る紫の君の心は云ひ顯しやうもなく悲しかつた。

『五の宮が御病氣なのだから、また一寸お訪ねして來ます。』

傍へさう云つて行つた源氏の君を見ようともしないで、紫の君は姫さんを膝の上に置いて遊ばせて居た。目にいつぱい涙の溜つて居るのを見て、

『なぜあなたはそんなに機嫌を惡くして居るのだ。餘り傍にばかり居ては珍しくなくなると思つて、態と私はこの頃外へよく行つたりなどするのだのに、それが却つていけないの。』

と源氏の君は云つた。

『珍しくなくなられたのは眞實に悲しいものですね。』

と云つて彼方向いて紫の君は泣いた。これを見捨てて出る氣にはなれないのであるが行くと云ふことを宮にお云ひしてやつた後であるからやめることも出來ずに源氏の君は出て行つた。こんな時が自分に來ようとは夢にも知らずに居たなどと思つて紫の君は悲しんで居た。雪の光に美しい後影の見えるのを眺めながら、戀しい人の姿を見ることの出來ない身になつたらと、そんなことまでも思つて泣いて居た。

『參内する以外に出歩くのはおつくうになつたのだけれど、自分が死んだら五の宮樣のお世話を頼むと式部卿の宮樣が私に云つてお置きになつたものだから。』

こんなことを伴れて行く家來達にも源氏の君は云つた。家來達はそれを拙いお言ひ訣だとをかしく思つて居た。變つたことが起らなけ

れば好いがと、紫の君のために眉を顰める者もないではなかつた。何時も變らない同じやうな話を、眠いのを辛抱してお聞きして居ると、五の宮も欠をおしになつて、

『宵惑ひでな。話もろくに出來ない。』

とお云ひになつたかと思ふと、もう鼾をかいてお出でになつた。内心に喜んで立つて行かうとすると、また源氏の君を年寄の女が呼びとめた。

『御存じで御座いませう。院の陛下がお祖母と仰せになりました私です。』

かう云ふのを思ひ出して見ると、それは源典侍であつた。この尼宮の弟子尼になつて居ると聞いたこともあつたが、もう死んだのであらうと源氏の君は思つて居たのである。

『奇遇ですね。』

と云つて源氏の君はまた坐つた。

『こんなに年寄になつてしまひました。』

と云ふ。この頃漸く老人になつたやうな口振がをかしい。この人が居た頃の宮中の女御や更衣はもう大方死んだ。生きて居ても何處に居るのか分らなく皆なつて居る。女院などさへも故人になつておしまひになつたのに、この人がかうして不身持の報いらしくもない氣樂さうな尼生活をして長命を恣にして居るのが不思議に思はれるにつけ、女院の死がまた新に悲しまれて源氏の君が萎れて居るのを見て女は自身のことが悲しまれて居るのだと得意にも思つて居た。まだ若い男と戀の言葉を取り替す甘い樂を夢みて居るのである。

『そのうちゆるりと話しませう。』

と云つて源氏の君は典侍に別れた。時刻は遲いのであるが、お入來を拒んだやうに思はれてもならないと西座敷の方では源氏の君のため

に少しばかり戸を開けてあつた。

『御自身でお逢ひ下すつて話がして戴けたら私はそれを機會に戀を斷念しても好いとも思ひます。』

こんなことも云つたが朝顏の君は聞かない。自分も源氏の君も若くて戀の過ちがあつても物議にもならない時代でさへも、自分は身を退いて居たのに、今になつて一段親しい交際をしようとも思はないと朝顏の君は思ふのである。餘程夜も更けて烈しい風の音が耳の傍で鳴る。心細さうに默然として源氏の君は坐つて居るのであつた。

『昔もさうであつた冷淡なお心に懲りて居る筈であるのに、思ひ切れない自分と云ふものも恨めしくなります。』

かう云つた源氏の君は涙を袖で拭いて居た。

『昔に變らないのが好いのだと思つて居ます。私は自分のことでなくても、心變りをする人などは厭だと思つて居ますから。』

六條の君の戀の末路の哀れであつたことが朝顏の君は今も忘れられないのであつたから、皮肉を云ふ積りでもなしについこんなことを云つた。

『姫樣は何故ああ冷酷に遊ばすのでせう。お氣の毒でお氣の毒で私がこんな目に逢つて居ると云ふことが世間へ知れては耻しいから、默つて居てくれなどと宣旨さんに云つていらつしつた。』

源氏の君の歸つた跡で女達はこんなことを云つて居た。朝顏の君は源氏の君をなつかしい人とは思つて居る。戀しいとも思はぬでもない。さうであるが世間の女見たやうに身體をその人の物にしてしまふのが戀の終局の望とは思つて居ない。然しこんな淡い清い考で戀を爲合ふと云ふことは男に出來るべきことでないから、いつそ冷い態度をとつて行くのが好いと思つて居るのである。尼にならうかともおもふが當附がましい爲打のやうに源氏の君がとつてもならないと

思つて時期を待つて居た。兄弟は大勢あるが皆腹違ひであるから疎疎しくて足らぬがちになつた宮家の經濟を補はうとする者はない。こんな場合であるから、わが主人と富貴な源氏の君との緣組を女達は皆望んで居た。源氏の君は世間の批難もかまはずに再進して樣つた戀を遂げないで終つてはいよいよ物笑ひになるとこの事にばかりこがれて紫の君の傍へ寢る夜も少くなつた。忍んで居ても紫の君は源氏の君の前で涙を零すこともあつた。

『何故そんなにして居るの。』

と云つて紫の君の額に掛つた髮を手で除けながら、心配さうな顏を源氏の君はその傍へ持つて行つた。

『女院がお崩れになつてからは陛下が寂しくお思ひになつて居るのがお氣の毒でつい御前で夜を明したりするやうになるのです。今迄のやうに私が一緒にばかり居ないので氣が塞ぐのは道理だけれ

ど私を疑つたり自身を不安に感じたりすることは入りませんよ。あなたはもう二十五でせう。それだのに子供見たいな人だね。思ひ遣りがないね。』

かう云つて涙で癖の附いた髮の毛を直してやりなど源氏の君はするのであつたが紫の君は物も云はない。顏を見られないやうに、見られないやうにと彼方向ける。

『一寸したことをそんなに拗ねても好いやうな癖は私があなたに附けたのですね。』

味氣なさうに云つて源氏の君は溜息をついて居た。

『前齋院に私があなたの事を忘れて戀をして居る樣にあなたは思つて居るのぢやないの。そんな事で取越し苦勞をして居るのぢやないの。あの人は昔から私の女友達のやうに思つて居る人なんですよ。私の方でそんな戲談を云つても笑つてしまはれる程のもので

すよ。誤解して居るのなら思ひ直して下さい。』

こんなことを云つて源氏の君は朝はやくから終日紫の君を慰めたり賺したりして居た。雪が澤山積つた上に清らかな月が美男のやうな顔を出した。

『私は春や秋よりも冬が一番好きだ。』

と云つて源氏の君は簾を捲き上げさせて、女の童を庭へ下して雪まろげをさせた。黒い髪が目に立つて美しい。そのなかでも小いのは子供らしく騒いで走り歩いて雪の上へ扇を落したりして居る。大きく塊りを拵へようとして轉すのであるが、もう力が足りなくなつて困つた顔をしたのもある。縁側へ出てそれを見て笑つて居る女の童連中もある。

『昔ね、女院が中宮でいらつしつた頃藤壺の庭で雪の山をお拵へさせになつたことがあつた。そんな風流な面白いことをさせるのがお

好きな方だつた。何かに附けて何時も私は彼の方を思ひ出す。私などの知つて居るのはほんの一面だけだらうけれど、柔かであつて氣品の高いあんな氣性の女の人はまあないね。あなただけは別だ。あの方の姪なのだから何處から何處まで似て居る。けれどものを恨んだり腹を立てたりする女院にない餘計な性質もあなたにはあるね。』

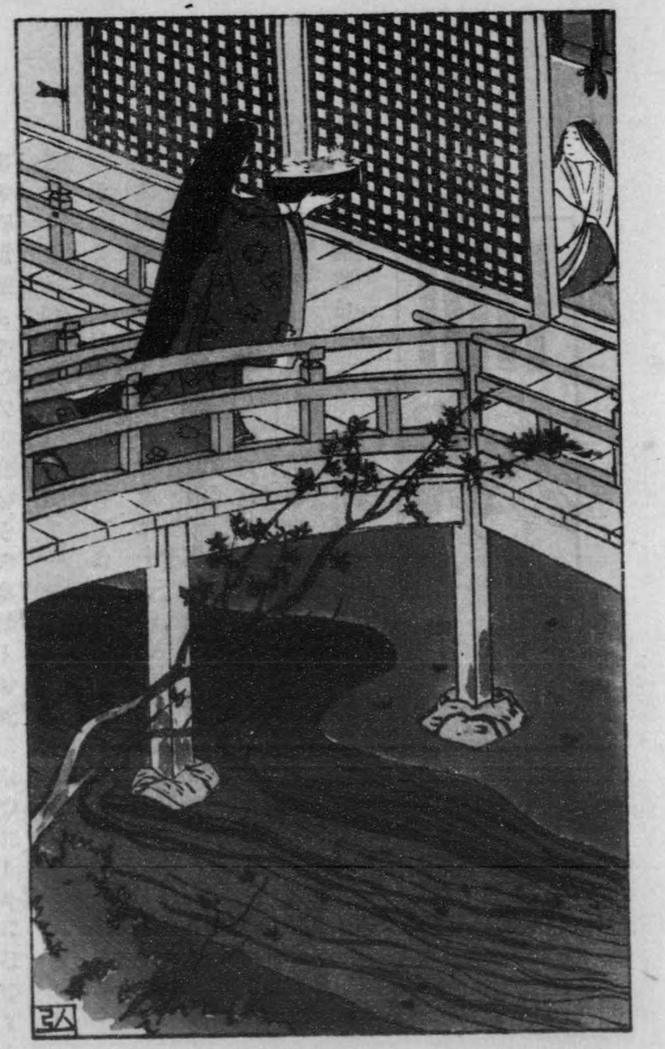
かう源氏の君に云はれて紫の君は耻しさうに笑つた。

『前齋院と云ふ人も變つて居る。親しみのある性質だけれど傍へ行つたら私が氣遲れをするだらうと思ふやうな人はあの人一人だよ。』

『尚侍が丁度そんな方だと云ふちやありませんか。それにどうしてあんなことがあつたのでせう。』

と紫の君は云つた。

『さうだね。さう云つたよりも美人の例に引く人だよ。』



と源氏の君は云ひながら、身を過たせた尙侍を思つて少し涙を零した。

『あなたは侮つて居るけれど、大井に居る人は身分に不相應な性格を持つた立派な女ですよ。氣の好い女と云ふのは東の院に居る人だ、ああは出來ないものだけれど。』

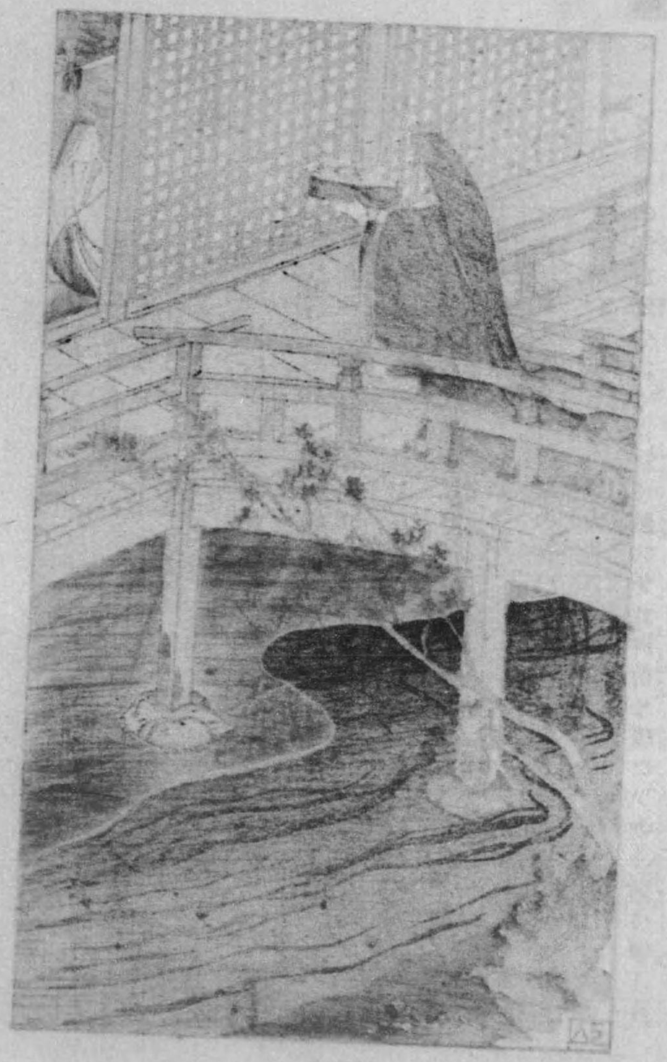
などとも源氏の君は云つて居た。女院の夢をその夜源氏の君は見た。

『やつぱり浮名が立つたではありませんか。』

と恨めしさうにお云ひになつたので、答へようとしても物が云へない。

『あなた。あなた。魔はれてはいけません。夢ですよ。あなた。』

と紫の君が云つたので目が覺めた。胸の騷ぎが容易に靜まらないで涙が零れた。



乙女

女院の御喪期が濟んで、世の中は夜の明けたやうに花やかな初夏になつた。加茂祭を今年は餘所事に聞いて居ると云つて、前齋院家の女達は詰らながつて居た。五の宮は朝顔の君によく、

『あなた、源氏の内大臣と結婚をなさつたら好いだらう。お薨れになつた宮樣も前からそのお氣が十分あつたのだが、あなたが、承知しないで居るうちに齋院になつておしまひになつたと云つて、何時も殘念がつておいでだつたのだよ。一つは三の宮樣の婿でもあるから、多少御遠慮もあつたのだが、その奥樣もお死になつたし、今になつて

またあんなにあたなを戀慕しておいでなのだから。』

とこんなことをお云ひになつた。

『お父樣も爲方のない强情者だと思つておいでになつた私ですから、今更結婚をしようとは思ひませんわ。』

と朝顏の君は云つて居た。葵の君の忘れがたみの夕霧の君はもう十三であるから、二條院で元服の式を上げたいと源氏の君は思つたが、祖母の宮がお見になることの出來ないのを氣の毒に思つて故關白家でした。源氏の君はこの子のために四位を乞はうかとも一度は思ひ世間でもさうあるべき筈だと思つて居たが、自身が關白をして居る時代で何事も自由になるからと云つてもこんな幼年者を不相應な四位にするのは宜しくないとまた思つた。元服した夕霧の君は六位の制服の淺黃の袍を着せられた。祖母の宮はあさましいことにこれをお思ひになつて、その後來訪した源氏の君に、

『あの子を六位におしになつたのはどう云ふお考へなのですか。』

とお云ひになつた。

『意外にお思ひにもなるでせうが、私は彼を大學へ入れて勉强させたいと思ふのです。ここ二三年まだ元服しないで居ると思つて居れば好いと私は思つて居るのです。朝廷の御奉公が眞實に出來るやうになれば自然に位などは上りませう。若い身で思ひ次第の榮職に就いたりしては學問に身を苦しめたりすることは馬鹿馬鹿しくなるでせう。遊ぶことばかりが好きな爲方のない人も親や親族の威光で世間からはえらい者のやうに立てられて居るでせうが、盛衰のある世の中で、その人達にがたりと死なれて御覽なさい。世間からは手の裏を返したやうに侮蔑されませう。自身でも恃む處がない心細い思ひをするのも學問のない人に限ることです。學問があつてこそ大和魂も發揮することが出來るのですから、當分のうちは

自身でも身がひけるやうな思ひもするでせうが、國家の柱石になる基礎を固めて置くやうなものですから、私が亡くなつても心配することもいらないと思ふのです。私が隨いて居れば大學生の貧乏人とも人は云はないだらうと思ひますから。』

と源氏の君が答へるのをお聞きになつて、

『さう伺ふと道理なのですがね、大將なども餘りに異例だと云つて愍然がるものですから子供心で殘念に思つて居るやうで、伯父達の子供を今迄自身よりも目下に思つて居たのが四位や五位で、その下に自身が隨いて居なければならなくなつたのが溜らないやうに見えるものですから、ついそんなことを云ひました。』

と宮はお云ひになつた。源氏の君は笑ひながら傍に居るわが子を見て、

『生意氣なことを云ふ割合に小い人だね。』

と云つて、可愛くてならないやうにも思つた。夕霧の君の儒者號を附ける式は東の院の東御殿で行はれた。珍しいことであるから高官達が我も我もと見に來た。今日の上客は大學の敎授の博士連であることは云ふまでもない。自分の子であるからと云ふやうな遠慮はいらない、法式通り嚴格に行つて貰ひたいと、前から源氏の君が云つて置いだので借着で皆身に合つて居ないやうな服裝をしながらずらりと上座に並んで坐つた。接待に出た若公達はさんざんに叱り飛ばされる。右大將や民部卿なども叱られた。忍びきれないで笑ふ者があると、

『鳴りが高い。默ることが出來なければ席をお引きなさい。』

と云ふ。皆が面白がつて居る中でも大學出身の人達は得意に見えた。夕霧の君の勉强所を源氏の君は東の院に拵へさせて家庭敎師を附けておいた。今も赤兒のやうにしてお可愛がりになる祖母の宮の傍へ置いては物が覺えられまいと源氏の君は思つたからである。月に三

度宮の所へお伺ひしても好いと源氏の君は許した。こんなに學問に苦しまないでも勝れた人間になれないこともないだらうがと、夕霧の君は思はないこともなかつたが、眞面目な人であるから、辛抱して早く課程の學問を終りたいと思つて勉強して居た。さうであるから四五個月のうちに史記などを讀んでしまつた。もう試驗を受けさせても好いだらうと思つて源氏の君は自身の前で伯父達や家庭教師の大内記と一緒に夕霧の君に史記の中の難しい所々を讀ませて見た。出來の好いのを見て、

『祖父が生きて居ましたらどんなに喜ぶことでせう。』

と云つて右大將は泣いた。大學の豫科から本科へと他の學生と同じやうに夕霧の君の踏んで行くのが學問の道の奬勵にもなつた。立后については梅壺の王女御、弘徽殿の女御、紫の君の妹の元の兵部卿今の式部卿の宮の王女御の中に激烈な競爭があつたが、結局源氏の君を後

援に持つて居る梅壺の王女御が后の宮におなりになつた。源氏の君は太政大臣になつて右大將は内大臣になつた。源氏の君はこの人に關白も讓つた。博學な手腕のある政治家であるからこの職が危げでもない。腹違ひのもませて子は十人餘りあるが、名門の子として耻しくない善い子ばかりで、もう相當な地位をえて居る人もある。女は女御の外にもう一人あるだけであつた。雲井の雁の君は或女王の腹に生れたのであつて、母系の立派なのは本妻腹の子にも劣らないのであるが、某女王は内大臣との間に雲井の雁の君を生んでから按察使大納言の妻になつて、今の夫の子を幾人も生んで居るのであるから、そんな所へ置いておくのは可愛相であると思つて、内大臣が引き取つて母の宮に預けたのであつて、内大臣は女御の半分程も可愛くは思つて居らぬやうすであるが、性質も容貌も美しい人である。雲井の雁の君と夕霧の君とは同じ祖母の手で大きくなつたのであるが、雙方とも十を越

した頃男の子と餘り馴れ馴れしくして居るのは宜しくないと内大臣が云つて居間なども別にさせた。併し幼い二人の戀はもうその時分には芽ぐんで居た。綺麗な花を持つて行つて贈つたり、雛遊びの相手になりに行つたり夕霧の君はした。乳母なども今迄さうして來た間柄であるのを俄にそれが悪いとも制することが出來なくて捨てておつた。一方は無邪氣な少女であつたが男の戀はもう大人びて居た。東の院へ移されたことはこのことがあるので夕霧の君には苦痛であつた。幼い手跡で遣取して居る手紙などを拾つたりすることがあつて、二人の關係を知つた女達もあつたが、内大臣や祖母の宮のお耳に入れることでもないと思つて知らぬ顔をして居た。時雨が降つて、荻の上を吹く風が悲しく聞える日の夕方に内大臣が來て、宮のお居間へ雲井の雁の君を呼んで琴を彈かせなどした。宮はあらゆる音樂に通じて居られるのであるから雲井の雁の君にはよく教へておありになつ

た。

『琵琶は女には不似合なやうですが實際は上品なものですね。あまり上手な人もないやうですが、源氏の大臣が明石から呼んで嵯峨邊に置いてある女の人と云ふのはそれの名人ださうです。大臣から聞いたのですから眞實のことでせうが、珍しいですね。』

などと内大臣は云つた。

『幸福者だとよく噂を聞きますがね、餘程怜悧な人ですね。生んだ子を手許へも置いておかずに本妻の方に渡してしまふなどと云ふことは出來ることではないがね。』

と宮はお云ひになつた。

『怜悧ですから幸福者にもなるのでせう。それにしても私の家の女御などはまあまあ足らないこともない女だと思つてましたが、意外な人に負けてしまひました。』

と内大臣は遣瀬なささうに云つて、雲井の雁の君を見て、

『これだけでもゆくゆくはお后と云はせたい、東宮の御元服も近いうちのことであらうからと私は思つてましたが、後にもうその幸福者の生んだお后の候補者が出來て居るのですもの。』

またかう云つて溜息をついた。

『さう氣を落すこともないでせう。この家はお后が出る家なのだとお云ひになつて、お父様が先に立つて女御をお上げするやうにもなすつたのだから、もう暫く生きて居て下すつたら女御は負けも取らなかつたらうがね。』

と宮はお云ひになつた。このことだけには源氏の君をも恨めしく思つておいでになるのである。内大臣はそれなり默つてじつと人形のやうな美しい姿で琴を彈いて居る雲井の雁の君を見て居た。夕霧の君が東の院から來たので几帳を置いて其處へ通した。

『あまり逢はないねえ。さう勉強をばかりさせるのはよくないと云ふこともお父様は知つておいでなのだらうがね。偶には笛なんかも吹いて御覽。』

と云つて内大臣が笛を渡すと夕霧の君は面白く吹いた。暗くなつたので灯をつけさせてそれから雲井の雁の君を居間へ歸した。内大臣は母と甥と三人で夕飯を食べた。雲井の雁の君とはなるべく間を隔てたいと大臣は思つて、彈く琴の音さへも夕霧の君には聞かせないやうにするのであつた。

『若樣が餘りお可愛相ですね。こんなことで一騷動が起るかも知れませんよ。』

などと云つて居る者もあつた。内大臣は歸つたやうに見せて關係のある女の部屋にはいつて居て、それからそつと出て行かうとして廊下を通る時、自身が聞くとも知らずに自身の陰口を云つて居るのが耳に

入つた。

『脱目がないやうに思つていらしやるのだらうけれど、私達から見ると親馬鹿ですね。何も御存じなしに姫様を皇太子様の女御に上げるなんか云つていらつしやるのですもの。』

これを聞いた内大臣ははつと胸が轟いた。夕霧の君と雲井の雁の君との關係を猶いろいろと語つて居た。思はないことでもなかつたが、そんなこともあるまいと油斷して居た自身の過ちが口惜しくてならない。世の中はこんな厭なものかと云ふ氣もしたがその儘そつと來た。今になつて前驅が人を追ふ聲が聞えたので、

『誰かの所に今迄いらつしつたのですね。浮氣の止まない殿様。』

と云ふ者もあつた。

『あの話をして居た時ね、誰かが廊下に居たのです。好い香がしましたから若様がお通りになつたのだと思つてたのですよ。あれがお

耳に入つたのだつたら大變ですわね。』

『眞實にとんでもないことをしたものですね。』

先刻陰口を云つて居た者は心配さうにこんなことを云つて居た。内大臣は道々、それほど惡い緣でもないが、一緒の所で育つた從兄弟同志の結婚は野合で成立つた夫婦だと世間でも認めるに違ひない、それに女御を踏附けたやうな爲打をした源氏の君の子にその妹を配す氣にもならない、東宮の女御にして萬一の僥倖でも待たうと思つて居るのだつたになどと思つて腹立たしさが靜まらなかつた。この人と源氏の君との間柄は大體昔の通りで、決して惡くはなつて居ないのであるが、一寸したことでは互の意志の行違ひになることなどもないのではない。内大臣は夜も寢られない程そのことで煩悶した。

『可愛くて溜らないお孫さんですから、宮様も知つて、知らぬ顔をしておいで遊ばすのでせう。』

などと女達の云つて居たことを思ひ出すと宮様が恨めしくてならない。感情の烈しい人であるから、さう思ふとちつとして居ることも出來ないで、二日程してまた宮の處へ來た。こんなに近々と内大臣の來るときは宮の御機嫌は好い。いそいそと美しい褂などをお着になつてお逢ひになる。大臣はむづかしい顔をして居た。

『かうして參つて居ても女達の目からどんなに私が馬鹿に見えて居るだらうかと思ふと氣がさします。つまらない人間ですけれど、生きて居ます間は始終お傍へ來て御機嫌も伺つて居たいと思つてましたのですが、馬鹿者のために私の心があなたをお恨みするやうになりました。こんなことを申し上げないで置かうと思ふのですが胸が靜まらないのです。』

と云つて大臣は涙を袖で拭いた。驚いて聞いておいでになつた宮も涙が出て假粧した顔のお目が大きくなつて見える。

『こんな年寄が何をあなたの氣に逆つたのだらう。』

おろおろ聲でかうお云ひになるのを聞いては大臣もさすがにお可愛相に思つたが、

『小い者のお世話を願つて、親でありながら自分が面倒を見ませんで上の女の子のために浮身をやつしてましたが、それでもあなたに監督して頂いて居ると思ふものですから安心をして居たのです。從兄弟同志で勝手な戀をして身を過つたりなどしたかと思ふと殘念でなりません。婿にしても耻しくない立派な身分だと云つても、内輪同志のやうな結婚は世間で何と云ひますか。あの人の爲にだつて喜ぶべきことちやありません。内輪の緣などのない外の所で婿君だと云つて珍重される方がどんなにいいか知れません。源氏の大臣も甥に女を押しつけたやうに私の事をお思ひになるでせう。たとへまたさう云ふことにしようとあなたがお思ひになつても私

に相談して下すつて正式の結婚をなせさせて下さらなかつたのです。勝手なことをさせて見ぬ振などをしておいでになつたのが恨めしいのです。』

と云つた。宮は夢にもお知りにならなかつたことであるから聞くごとに呆れておいでになつた。

『それはあなたの腹を立てるのは道理だけれど、私は若い人達の心持も内密事もすこしもしらなかつたのですよ。そんなことは私の方があなたよりも餘計殘念に思はなければならないことだのに、私までも同罪に思つてくれるのは餘りです。手許へ來た時から可愛くてあなたがそれ程にしようと思つて居ない處まで私が氣をつけて、お后になる資格を持たせた女にしたいと思つて居たのです。女の生んだ孫の可愛さに目がくれて、年の行かない者と緣を組ませようなどとそんな沒常識なことを考へるものですか。然しこのことは誰

があなたに云つたのですか。うつかり人の云ふことを信じなどしては自身の子にありもせぬ傷を附けるやうなことになりますよ。』

『ありもせぬ傷なものですか。女達が陰で笑つて居ることを思ふと溜らない。』

半獨言のやうに云つて大臣は座を立つた。事情をよく知つて居る女達は宮をお氣の毒に思つて居た。前の晩にその話をして居た人達はことの成行きに恐れて死んだやうになつて居た。雲井の雁の君は無心な美しい顏をして、入つて來て、父を見た。

『年が行かないと云つても、それ程もの事が分らないとも思はないで、あなたを人並の者だと思つて居たかと思ふと、あなたより私がすたり者になつたやうに悲しい。』

と云つて、それから大臣は傍に居る乳母なども責めた。

『もう取り返しのつかないことはいくら云つても爲方がない。評判

も立つことだらうがおまへ達は罪亡しに極力それをないことだと
お云ひ消しなさい。近いうちに私の家の方へ伴れて行くつもりだ。
おまへ達も然し喜んでそんなことをさせたのではないだらう。宮
様のお心から出たことなんだらうから。』
こんなことも云つた。宮は可愛い中にも夕霧の君の可愛さの方が強
いのであるから、このことをそれ程いけないこともお思ひにならな
い。もとよりそれ程大切に思つて居なかつた子だつたのを、自分が存
分に育ててやつたればこそ、皇太子にお上げする氣にもなつたのでは
ないか、さう云ふ事が望み通りに行かないで普通の人と緣組をさせる
やうなことだつたら、これ以上の婿はあるものではないではないかと
お思ひになつて、夕霧の君の爲方が惡いと云つて腹を立てて居た大臣
を恨んでおいでになつた。自身のためにこんな騷ぎが起つて居ると
も知らないで夕霧の君が來た。この間の夜は伯父が居て雲井の雁の

君と思ふやうに話が出來なかつたためにあひたくなつて來たのであ
るらしい。平生夕霧の君が來ると宮は云ひやうもない笑顔でお迎へ
になるのであつたが、今日はさうでない。眞面目なお顔をしていろい
ろと話をされた後で、
『あなたのことで內大臣が此處へ怒つて來たのよ。好いことでない
ことを初めて、いろんな人に心配をさせてこまつたのねえ。あなた
に云はないでも好いことなのだけれど、そんなことになつて居るの
を知らないで居るといけないと思ふから。』
とお云ひになつた。自身の罪を知つて居る夕霧の君には此處で今日
起つた出來事が直ぐ想像された。顏をぽつと赤くして、
『何でせう。勉强ばかりして居て何も外のことはこの頃しませんの
に』
と云つた。耻ぢた苦しさうな樣子をお見になると宮は可愛さうでな

らない。

『これからでも氣をつければいいのよ。』

と云つて、後を外の事に紛らしておしまひになつた。これからは手紙を遣取することもむづかしくなるのであらうと思ふと、夕霧の君は悲しくてならなかつた。食事をすすめても食べない。横になつて寢た振をして居たが、心はどうかして雲井の雁の君に逢ひたいと云ふことばかりを思つて居た。皆が寢靜まつてから、雲井の雁の君が居る座敷の襖子の處へ來て開けようとしたが錠が下りて居た。心細くなつて夕霧の君はそのまま襖子にもたれて居た。雲井の雁の君も竹に鳴つて居る秋風の音や遠方で啼く雁の聲などを聞いて居ると悲しみが胸いつぱいになつて寢られないで居た。

『私のやうに雁も悲しいのだらうか。』

戀しい人の云ふ獨言が耳に入つた夕霧の君は、嬉しくて、

『小侍從は居ないのですか。』

と云つた。雲井の雁の君は何とも答へないで顏を蒲團の中に隱してしまつた。そして幼ない戀人同志は見えぬ所で同じやうに熱い涙を零して居た。夕霧の君は翌朝早く起きて手紙を書いて渡さうと思つて居たが小侍從に逢ふことも出來なくて胸ばかりわくわくとさせて居た。大臣はそれきり來ない。夫人にはそんなことのあつたと云ふことは少しも話さないのであるが、何と云ふことなしに大臣は毎日機嫌がわるかつた。

『中宮が花々しくしておいでになるのを見ると女御はさぞ味氣ないだらう。ゆるりと家で暫く遊ばせてやりたいやうな氣がする。』

と大臣は云つて、陛下が暇を與へにくさうにおしになるのを强ひて願つて女御を宮中から迎へて歸つた。

『寂しいだらうから、妹を伴れて來てあなたの遊相手をさせよう。宮

様にお預けしておいて安心なやうなものだけれど、もう大分大きくなつたのだから、年の行つた女達とばかり居させるのも善くないと思ふから。』

と内大臣は女御に云つて、雲井の雁の君を急に此處へ引き取ることにした。行つてさう云ふと宮は本意なくお思ひになつたが、かうと思つたことは思ひ返す人でないのを知つてお出でになるから、恨みながら諦めておいでになつた。また夕霧の君が來た。一寸でも逢ふことが出來るかと思つてしげしげこの頃は來るのであつた。内大臣の車があつたので氣が咎めてそつと家の中へ入つて自身の居間にしてある處に隱れて居た。

『これから參内して、夕方に迎へに寄ります。』

と云つて大臣はこの家を出た。大臣は世間體を好いやうに繕つて、二人を夫婦にさせようかともおもふのであつたが、男の官位がも少し昇

進した上、深い愛情のあるなしも見定めて、改めて正式な結婚をさせる方が好いであらうと思つたので女御の遊相手にと云ふ口實を作つて穏かに伴れて行かうとするのであつた。

『私は年寄だから、そのうちあなたとは死別れをせねばならないと思つて悲しがつて居たのだけれど、こんなに生別れをせねばならないやうになりました。死んだ女の子の代りだと思つて、どんなにあなたを育てて行くことが私には樂みだつたらう。それにしても違つたお母さんの所へお行きなんだから可愛さうだね。』

傍へ來た雲井の雁の君に宮はかう云つてお泣きになつた。雲井の雁の君は自身の戀の過ちからこんなことになつたことを知つて居るから、恥しくて顏も上げないで泣いてばかり居た。年齡は十四であつた。まだ調はない所もあるが美しい。夕霧の君の乳母の宰相の君が出て來て、

『私どものためにもあなたは御主人だと思つて居ましたのに、彼方へおいでになるので御座いますか。ねえ姫様、お父様がまたどんな方と御縁組をさせようとおしになるかも知れませんが、そんなことを御承知遊ばしてはいけませんよ。』

と小聲で云つた。雲井の雁の君はいよいよ耻しがつて物もよく云へない。

『そんなむづかしいことを云ふものではないよ。縁ばかりは分らないものだから。』

と宮が横からお云ひになつた。夕霧の君が几帳の後に隱れて泣いて居るのを、乳母は可愛さうでならなく思つて、居間へ歸つたやうに宮をお欺ししして夕方の暗まぎれに雲井の雁の君を伴れて來て逢はせた。暫くの間二人はものも云はないで泣いて居た。

『伯父様が彼様に怒つていらしやるから、思ひ切らうと思ふのだけれ

ど、やつぱり戀しい。こんなに逢はれなくなつてしまふのだつたら、もつとよくこれまで逢つておけばよかつた。』

『私もさう思ふの。』

『思ひ出してくれますか。』

と男が云ふと女は點頭く。灯が彼方此方について大臣が歸つて來た。前驅の聲が騷しく聞えてくる。女達がはらはらとして、

『どうしたら好いでせう。』

と小聲で云ひ合つて居る。雲井の雁の君は戰慄へて居る。夕霧の君はそれでも戀人を彼方へやらうとはしない。雲井の雁の君の乳母が搜しに來てこの樣子を見てびつくりしたのも道理である。やつぱり宮樣が知つてさせてお置きになることだなどとも思つた。

『こんなことはお母樣の處の大納言樣に聞えても面目ない。いかに好いお家の若樣でも六位の婿樣はいやなこと。』

と云つて居る聲が聞えたので、自分を嗜めるつもりで云ふのであらうと思つて夕霧の君はあさましくなつて厭な氣持がした。

『あんなことをあなたの乳母が云つてます。』

と女に云つた。間もなく雲井の雁の君や附いて居る女達を乘せた三つの車がこの家から出た。新嘗會の五節の舞姫の一人を今年は源氏の君が奉ることになつた。按察使大納言の妾腹の子左衛門督の子、近江守の良清の子などが出るのであつて、今年の舞姫は直ぐに女官に採用されると云のである。源氏の君は攝津守惟光の美しいと云ふ評判のある女をそれにえらんだ。舞は自宅でよく習はせて前日の夕方に二條院へ伴れて來た。夕霧の君は雲井の雁の君と別れてからは書物も讀む氣にならないで鬱いでばかり居るのであつたが慰みにもなるかと思つて二條院へ舞姫を見に來た。美しくて樣子のしづかな若殿を若い女達はなつかしがつて居たが、源氏の君は紫の君の居る所では

簾の前へも夕霧の君を坐らせない。藤壺の宮を自身が戀したはじめの心などから、美しい繼母の傍ほど危いものはないとおもはれもするのであらう。女達などとも親しくないのであるが、今日は騷しいのに紛れて御殿の中を彼方此方と夕霧の君は歩いて居た。屏風で圍つて拵へた舞姫の假の部屋の傍へ寄つて、そつと覗くと舞姫は横になつて苦しさうにして居る。丁度雲井の雁の君と同じ程の年齢である。背丈はこの人の方がすこし高いやうで姿や顏などはその人よりも美しい。暗いのでよくは見えないのであるが、戀しい人に似たやうな氣がするので心が移ると云ふ程でもないがこの人もなつかしい。傍へ寄つて着物の端を手で引いた。驚いて居る舞姫に、

『私は久しい前からあなたのことを思つて居るのです。』

と夕霧の君はこんなことを云つた。わかい美しさうな男の聲ではあるが誰とも分らないから舞姫は恐いやうな氣がして身體を後の方へ

引いて居た。其處へ世話役の女が假粧を直すとか云つてどやどやと入つて來たので、夕霧の君は心を殘しながら出て行つた。今年の五節の舞姫はみな少し大きく、そして美しかつた。源氏の君は庭で舞ふのを陛下の御前に居て見ながら、昔この舞姫の一人を戀しく思つたことなどを思ひ出して居た。それから、

なつかしきかないにしへの
とよわかひめの宮少女、
神さびぬるや、老いぬるや
羽衣つけて舞ひし日は
われの心に今もうつれど。

かう書いて大貳の女の五節の君に送つた。夕霧の君は舞姫が戀しくてまた逢へるかと思つて、居る所の近くへ行かうとしたが、人が寄せ附けなかつた。美しい顏が目に殘つて戀人とわかれた心の慰みにこの

人を自身のものにしたいと思つた。舞姫はそのまま宮中に殘つて女官になる筈であつたが、口實を拵へて皆一先づ自宅へ歸つた。典侍の職に空きがあるので、惟光は女をそれに任官させたいと思つた。源氏の君もさうしてやりたいと思つて居ると云ふことを夕霧の君は聞いて殘念に思つても、少し年でも行つて居たなら自分が所望して見るのであるがと思つて歎息して居た。その人の弟はまだ童であるが宮中へ上つたり二條院へ來たりなどして居て、夕霧の君とも親しい。

『姉さんは何時御所へ行くの。』

『今年の内だと云ふことです。』

『顏が一番好かつたからあの人が私は戀しい。おまへなどは何時も見られるから好いねえ。私にもう一度見せてくれないか。』

と夕霧の君はその子に云つた。

『私だつて男の兄弟だと云つてあまり近くへやつてくれない位です

もの。あなたにお見せすることなんかとても出來ません。』
『さうかねえ。それでは手紙だけでも持つて行つておくれ。』
と云つて夕霧の君はその子に手紙をことづけた。こんな使をすると父がやかましく云ふのであるがと思ひながら、主人の家の若樣を氣の毒におもつて姉の處へそれを持つて來た。女は年よりもませた心があつて、手紙を貰つたことを嬉しく思つた。綠色の紙に書いた手紙を弟と二人で讀んで居る所へ父が來た。びつくりしたが、二人とも隱すことが出來なかつた。
『何の手紙だ。』
と云つて、父はそれを取つて讀んだ。
『馬鹿な使をしたのはおまへだらう。』
と云はれて男の子が逃げて行くのを呼んで、
『誰の手紙を持つて來たのだ。』

と惟光は云つた。
『殿樣の處の若樣のです。』
と云つて、それからその子は手紙を持つてくるまでの順序を話した。
惟光は急に嬉しさうな顏になつて、
『おまへと同年でも若樣はもうこんな大人らしいことをなさるぢやないか。』
と云つた。惟光はその手紙を妻にも見せた。
『この方々の思はれ者になるのだつたら、私は喜んでさし上げるよ。殿樣は澤山の女に關係をおしになつたが、御自分の方から誰だつてお捨てになつたことはないのだ。若樣もさう云ふ質の人だ。私も幸福者の明石の入道にならうかな。』
などと惟光が云つて居るうちに姉も弟も其處には居なくなつてしまつた。夕霧の君は手紙も遣ることの出來なくなつた。雲井の雁の君が

戀しくて月日が經つに隨つてどうかしてもう一度逢ひたいと思ふより外のことは思はないやうになつた。源氏の君は夕霧の君を同じ東の院に居る花散里の君の子にさせた。氣質の柔い人で子のないのを寂しく思つて居るのであるから、喜んで花散里の君はその世話をして居た。夕霧の君はうつくしくない第二の母を見て、心の持ちやうでこんな人でも捨てずに居られるのに、たつた一人の人に戀ひこがれて居ると云ふのは云ひがひのない自分だなどとも思つた。顏はどうでもこの母のやうな氣質の優しい人を自分も妻にすれば好いだらうとも思ふのであつたが、然し餘り醜い妻は顏を見るのが氣の毒になつて間が惡いだらうなどとも思つて居た。年の暮になつたが、今年は夕霧の君の春着ばかりをいろいろと宮は拵へておいでになつた。幾重ねも幾重ねも出來上つて居るのを見ても夕霧の君は嬉しいとも何とも思はない。

『正月にだつて參内しようとも思つて居ないのに、何故こんなにお拵へになるのです。』

『愚物な。年寄じみた死ぬのに間のない人のやうなことを云ふ。』

『年は取らないけれど、死ぬのに間のない人のやうな心持がする。』

と獨言のやうに云つて夕霧の君は涙ぐんで居た。雲井の雁の君のことを思つて居るのであらうとお思ひになつて可愛さうで宮も泣きたいやうな氣持におなりになつた。

『男と云ふ者はつまらない人でも氣位を高く持つて居なければならないものだのに、一人の女のことでくよくよと思つて居て泣いけない。』

『そんなことを思つて居るのぢやありません。六位だと云つて皆が侮りますもの、參内するのも厭になるのです。お祖父さんがお出でだつたら、戯談にだつて私を侮る人なんかはないだらうと思ひます。

眞實の親ですけれどお父さんは私に隔てがある樣な氣がする。二條院へ行つても直ぐ歸すやうにおしになる。東の院でだけは傍へも寄れますけれど、それに西御殿のお母さんは優しくして下さいますけれど。』

と夕霧の君は云つて、また、

『親がもう一人生きて居て下すつたならと私はそればかり思ひます。』

と云つて涙の零れるのを紛らして居る孫が可愛さうで、宮は聲を上げてお泣きになつた。二月の二十日に陛下は上皇のおいでになる朱雀院へ行幸になつた。父帝の時の花の宴のことをお思ひ出しになつて院の陛下は源氏の君と昔のことをお話しておいでになつた。今日は名の聞えた詩人などはお呼びにならないで大學の學生の勝れた人を十人お招きになつた。そして式部省でする試驗問題のやうな詩文の答文を作らせた。夕霧の君のためにさうはからはれたことであつた

らしい。陛下は皇太后がおいでになるのを訪はないのも惡いとお思ひになつて夜が更けたが歸りがけにその御殿へお寄りになつた。皇太后は嬉しくて堪らない御樣子であつた。

『昔のことは忘れて居るのでしたが、かうしておいで下さいましたにつけてもいろいろのことが思ひ出されます。』

とお云ひになつた宮は泣いておいでになつた。

『私も父や母に別れましてからは春と云つても面白く暮すことが出來なかつたのですが、今日は誠に愉快でした。またそのうち參りませう。』

と陛下はお云ひになつてお立ちになつた。源氏の君も挨拶した。皇太后はこの陛下や源氏の君を咀つて思つた昔の自身のお心をあさましく思つておいでになつた。尙侍と源氏の君との間には今も文の行きかひがあるやうである。夕霧の君は行幸の日の詩文の成績がよく

て進士になつた。及第した三人の中の一人なのである。そして秋の叙任期に侍從になつた。源氏の君は住居を廣く造つて大井の人など も一緒に住ませたいと思つて中宮の元の家も交せて四町四方の邸宅を造らせて居た。式部卿の宮が來年五十におなりになるから、その賀宴をしたいと紫の君が用意して居るのを、同じことならば新しい家でさせたいと思つて源氏の君は普請を急がせて居た。春になつてからは賀宴に附帶した法事の日の僧達の裝束、來客に出す贈物などの支度で紫の君は一層急しくなつて東の院の花散里の君にも爲事を分けて頼みなどして居た。紫の君とこの人とは前から氣持よく附合つて居るのである。式部卿の宮の賀の祝ひの用意に一般の世間までが騒いで居るやうなのを宮は過分なことのやうに思つて喜んでおいでになつた。氣の寛い人であるがある一時の宮のお爲向が惡かつたために、一時は復讐的の態度を源氏の君は取つてゐたのであるが、天にも地に

もない最愛の妻の實父でおありになるのであるから、そんなことを何時までも續けるものでもないのである。八月に六條院が出來上つた。西南の一廓は中宮のお家の跡である。そこは中宮のお住居、東南は源氏の君が紫の君と一緒に居る所、東北は花散里の君、西北は明石の君の住む所と決めてあつた。元あつた池や山も惡い所は崩して其處に住む人のそれぞれの好みに任せて庭を作つた。東南の庭は山を高くして春咲く花の大木をいろいろと交せて植ゑた。池も此處のは勝れて廣い。座敷に近い所には紅梅藤山吹躑躅などに秋草や紅葉が交せて植ゑてある。中宮のおいでになる所の庭は、元の山に好い色をする紅葉をまた澤山植ゑ、泉を深く堀らせて、水の瀨の音を好くするやうな石を組ませなどした。瀧もある。そして秋草の原を廣々作つてある。丁度時節に逢つて盛りに咲いて居る。花散里の君の庭は見るから涼しさうな水が湧いて居て、此處は夏を主として作つてあるのである。

近い庭には竹が澤山植ゑてある。大きい森もあつて山家のやうな卯木垣なども、態と拵へてある。撫子や薔薇の間には春の花草や秋草もないではない。其處の東は馬場にしてあつて矢來で廣く圍つて池の傍には菖蒲が茂らせてあつて、突當りは厩である。もう一つの庭の北の端には藏が建て列ねてあつて其處と庭との隔てには大きい松が並べて植わつてゐる。雪の眺めに好いやうにとである。冬のはじめの霜の朝に優しい趣を見ようとする菊の垣根、柞原などもあつて餘り名も知れない高山の木が澤山植わつてゐる。彼岸の頃にひつこしがあつた。一度にとも源氏の君は思つたがあまり大層になるので中宮は少しお延しさせた。紫の君の車には四位や五位の人が大勢供して行つた。花散里の君の列もそれに餘り劣らせてはない。夕霧の君の母になつて居る人であるからかうもあるべきことだと人も思つた。女達の部屋部屋などの行き屆いた建て振りは外に見られないものであ

つた。五六日して中宮は宮中から出ておいでになつた。これは私人の儀式とは何と云つてもまた違つた光彩のあるものであつた。運の好い方と云ふばかりではなく、人品の清い尊い方で非常な聲望を持つておいでになる。九月になつて中宮のお庭の紅葉が美しくなつた。中宮は箱の蓋にいろいろの秋の花紅葉を入れて紫の君にお贈りになつた。

心から春待つ園はわが宿の紅葉を風のすさびにも見よ

こんなお歌がつけてあつた。明石の君は十月になつて移つて來た。

木版　長谷川香木
同版　前田剛二
同日本印刷　井上鎮平
活版　西村熊吉
製本　秀英舎
金子督太郎

明治四十五年二月十五日印刷
明治四十五年二月廿一日發行
大正二年十一月十一日第十版

金參圓拾錢

著作權所有

著作者　東京市麹町區中六番町十番地　與謝野晶子

發行者　東京市麹町區平河町五丁目五番地　金尾種次郎

印刷者　東京市京橋區西紺屋町二十七番地　佐久間衡治

印刷所　東京市京橋區西紺屋町二十七番地　株式會社秀英舍

發兌元　東京市麹町區平河町五丁目五番地　金尾文淵堂
（特電話番町二〇九三番　振替東京三八一七番）

晶子女史近作書目

中澤弘光氏彩畫

□新譯源氏物語　上卷　特價金貳圓五拾錢

□新譯源氏物語　中卷　特價金貳圓五拾錢

□新譯源氏物語　下卷の一　特價金貳圓五拾錢

□新譯源氏物語　下卷の二　特價金貳圓五拾錢

藤島武二氏裝幀　中澤弘光氏彩畫

□春泥集　七版　金壹圓

□佐保姫　三版　金壹圓

藤島武二氏彩畫

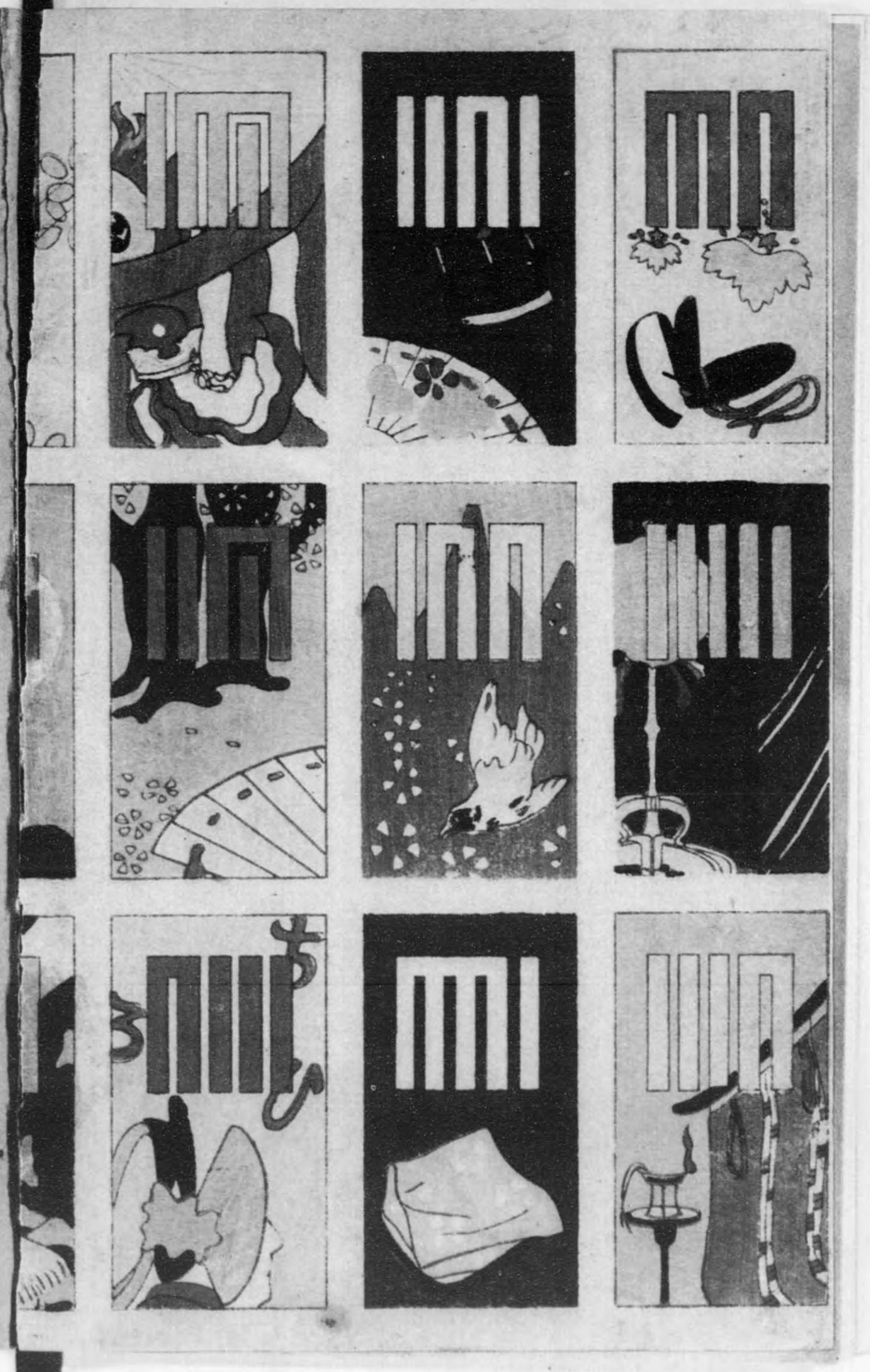
□一隅より　二版　金壹圓貳拾錢

藤島武二氏彩畫

□夏より秋へ　近刊　金壹圓八拾錢

□明るみへ　近刊

金尾文淵堂藏版



329
168/1

終